

宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡の集落構成について

小林圭一

1 はじめに

宮城県七ヶ宿町に位置する小梁川遺跡は、縄文時代前期末葉～中期中葉の長期間にわたった集落跡が検出され、また膨大な土器資料が得られたことから、東北中・南部（大木式土器分布圏）の中期前半を代表する遺跡として周知されてきた。取り分け東側遺物包含層では、大木6～7b式土器の5階梯にわたる変遷が層位的に分離され、相原淳一氏による所謂「小梁川編年」（相原ほか1986）が提示されたことで、中期前半期の編年研究の指標に位置づけられてきた。一方遺構に関しては、大木6～8b式までの竪穴住居跡やフラスコ状土坑等の円環状の配列状況が確認されたが、集落の年代の変遷については長大な付図4枚に総括されたに過ぎず、土器型式研究に比して分析が不十分であるように見受けられた。

東北中・南部においては、縄文前期末葉大木6式期に遺跡数が増加し繁栄期（人口増加期）を迎えたのに対し、中期初頭五領ヶ台Ⅱ式並行期では遺跡や遺物が極端に少なく、住居跡の検出例もなくなるなど、一時的な衰退期（人口減少期）にあり、続く大木7a式の竹ノ下式並行期になって回復・安定したことが指摘されている（今村2010：464－465頁）。前期末葉から中期初頭にかけてスムーズに推移したのではなく、繁栄と衰退の過程を経て中期社会に移行していったと推測され、詳細な型式編年に基づいた集落研究からの解明が課題となっている。

小梁川遺跡は前期末葉に集落の形成が開始され、中期中葉にかけて規模の大きな集落へと発展を遂げたが、土器研究では8期（板沢地区は7期）に区分されている。本稿では土器型式区分に準じて遺構の配置状況を観察し、中期集落の形成から終焉までの過程を素描する。筆者は嘗て同遺跡の大木6式土器を分析するに際して、遺構配置を示したコンパクトな全体図を作成した（小林2016）。加工が容易なデジタルデータで、前期末葉の

一時期に限定するには惜しまれたことから、後続の時期に対象を拡げ、報告書で時期が特定された遺構をそれぞれにプロットしてみた^(註1)。これ等の図を用いて、小梁川集落の消長を解説したい。

2 小梁川遺跡の概要

(1) 小梁川遺跡の立地と調査の経緯

小梁川遺跡は宮城県の南西端、白石川に沿った刈田郡七ヶ宿町字小梁川・字板沢・字白ハゲに位置する。白石川は流路延長60.2kmの阿武隈川水系の左支川で、山形県境となる奥羽山系の蔵王連峰の南麓を水源とし、大梁川や小梁川等の小河川を合わせ蛇行しながら東流し、その流域には狭長な山間盆地（七ヶ宿盆地）が形成されるが、その後北方に流路を変え白石盆地に流入し、大河原・船岡等の盆地を繋いで、柴田町槻木付近で阿武隈川に合流する。また白石川を西方に遡ると奥羽脊梁山脈の鞍部である二井宿峠に至り、山形県内の最上川上流域の米沢盆地の北東端に通じている（図1）。

小梁川遺跡は阿武隈川との合流点から白石川を約41km（直線で29km）遡った左岸の河成段丘に立地しており、南流する小梁川との合流点に当たり、遺跡の南端は白石川に面する段丘崖、東端は小梁川に面する段丘崖となっている（図2）。遺跡は標高260～270mの平坦面に形成され、その広がり東西約150m、南北約300mで、面積は約48,000㎡に及び、白石川に面する段丘の比高は約10mを測る。

小梁川遺跡の発掘調査は七ヶ宿ダム工事に伴って宮城県教育委員会により、1981年4～10月と1982年4～11月の2ヶ年にわたり実施され、『遺物包含層土器編』（相原ほか1986）、『縄文時代遺構編』（村田ほか1987）、『石器編』（佐藤ほか1988）の3冊の大部の発掘調査報告書が刊行されている。発掘調査では縄文時代早期末葉～中期中葉の遺構・遺物が検出されたが、主体となるのは前期末葉大木6式～中期中葉大木

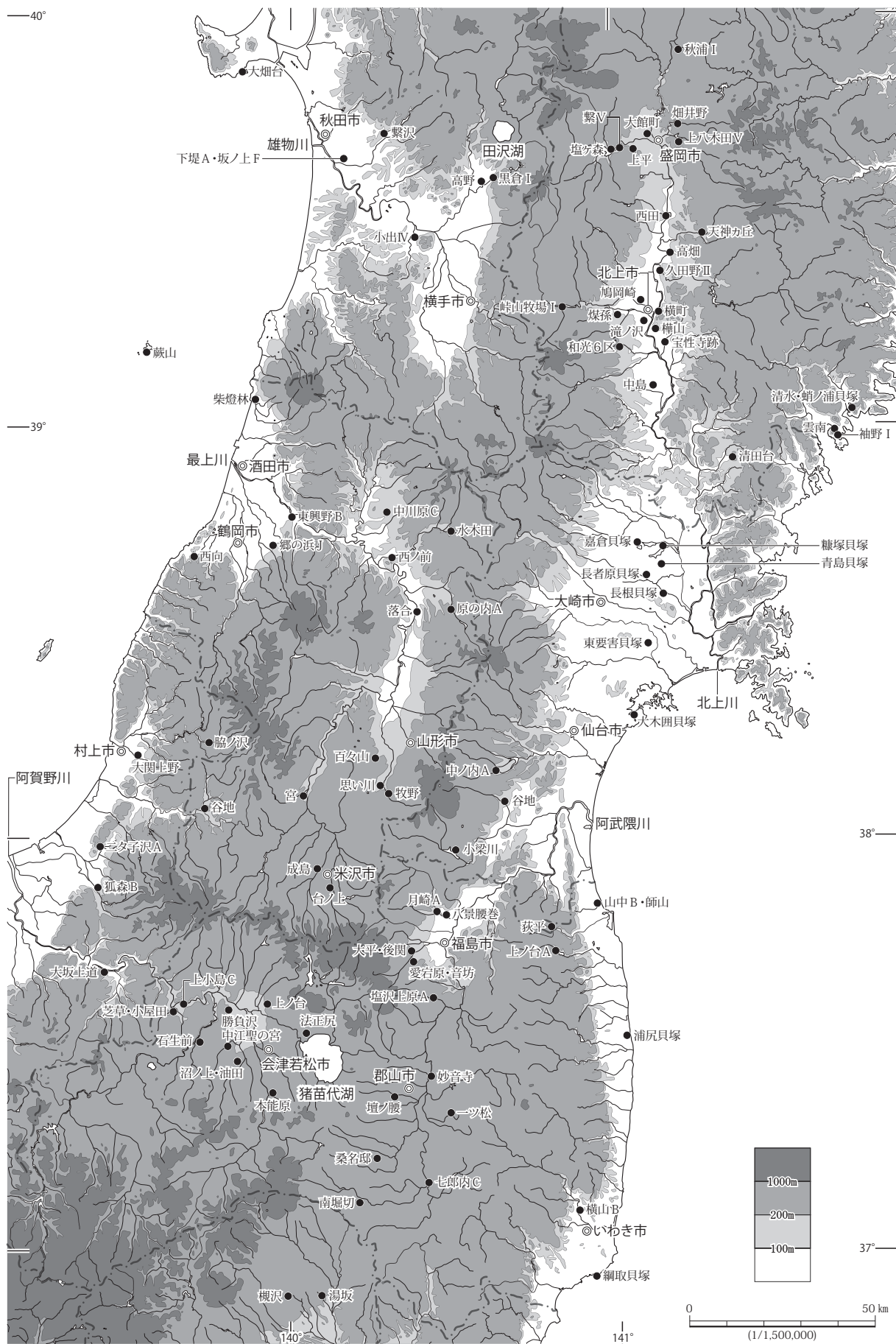


図1 東北中部・南部の縄文時代中期前葉（大木 7a～7b 式）の主要遺跡

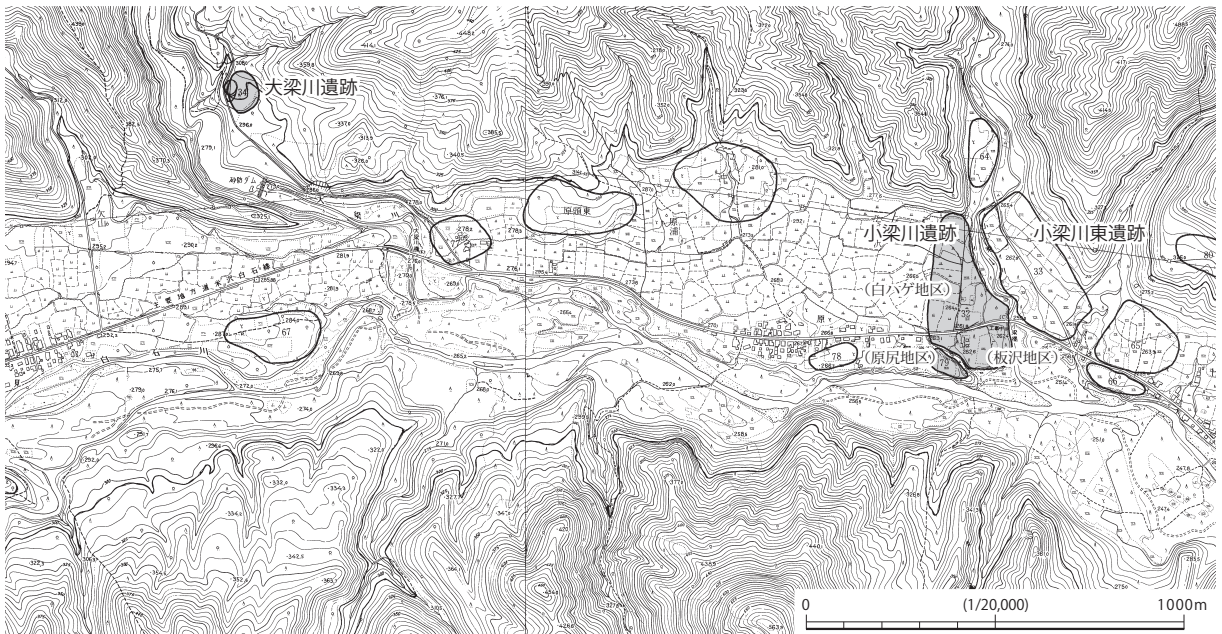


図2 宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡・大梁川遺跡位置図

8b式までで、中期後葉大木9式以降は2km上流の舌状丘陵に立地する大梁川遺跡(図2)に主体を移したと推定される。

(2) 小梁川遺跡の集落構成

小梁川遺跡は、白ハゲ・原尻・板沢の三つの地区から構成される。国道113号の北側が白ハゲ地区、南側のうち東方が板沢地区、西方が原尻地区(註2)で、後二者の間に幅20m程度の谷(ぬすびとざわ)が介在する(図3)。縄文時代前期末葉(大木6式)～中期中葉(大木8b(古)式)の集落は南東側の板沢地区に形成されており、それ以前の早期末葉～前期初頭は原尻地区と白ハゲ地区、前期前葉は板沢地区に主体があり、後続する中期中葉(大木8b(新)式)には板沢地区から白ハゲ地区に主体が移り、集落跡としての終焉を迎えている。小梁川遺跡で検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡35棟、焼け面を囲むピット群6基、土坑800基以上(フラスコ状土坑197基)、埋設土器遺構30基、墓壇8基、配石遺構2基、遺物包含層2ヶ所である。

集落の主体である板沢地区は、南西方向に張り出した東西約100m、南北約120mの舌状の段丘面で、標高261～262mを測り、東側は小梁川、南側は白石川、西側は盗人沢に画される(図3)。遺構の広がりを見ると、舌状の平坦面の大半を占め、直径約90mの環状集落の様相を呈している。中央のDC75区付近から261mのコンターラインにかけた径約20mの範囲の遺構密

度が希薄で、その外周を土坑と竪穴住居跡が取り囲むが、南側の崖線付近の遺構も少なくなっており、三方を囲む構成となる。また埋葬に関わる墓壇と埋設土器は居住帯よりも内側に散在するが、墓壇が特定の区域に集中する傾向は認められない。

板沢地区の集落は、遺構の分布状況から南北のDE列を基準に「東群」と「西群」に大別され、更に東群は東西の75列を基準に南群と北群に区分される。従って集落は三つの区域に大別され、「北東群」、「南東群」、「西群」と呼称する。また西群は境界が不明瞭であるが、75列で「北西群」と「南西群」に分割されると考えられる。

竪穴住居跡 板沢地区と原尻地区では、縄文時代の竪穴住居跡が29棟検出されたが、その内訳は早期末葉1棟、前期前葉10棟(註3)、Ⅱ期(中期中葉)3棟、Ⅲ期(中期中葉)1棟、Ⅴ期(中期前葉)3棟、Ⅵ期(中期中葉)5棟、Ⅶ期(中期中葉)2棟、時期不明4棟で、早期末葉と前期前葉を除く18棟は縄文中期の住居跡に該当する。その中には長軸が15m前後の大型竪穴住居跡が2棟含まれる。主軸を集落の中心に向けて北東群に並列して存するが、時期が明確なのは46号住居跡(Ⅱ期)のみで、58号住居跡は近似した時期と推定されるものの、出土した土器は極僅かで、時期の特定は困難である。竪穴住居跡は西群(9棟)に集中し、北東群は大型竪穴住居跡、南東群は大木7b式(Ⅴ期)1棟と大木8b(古)

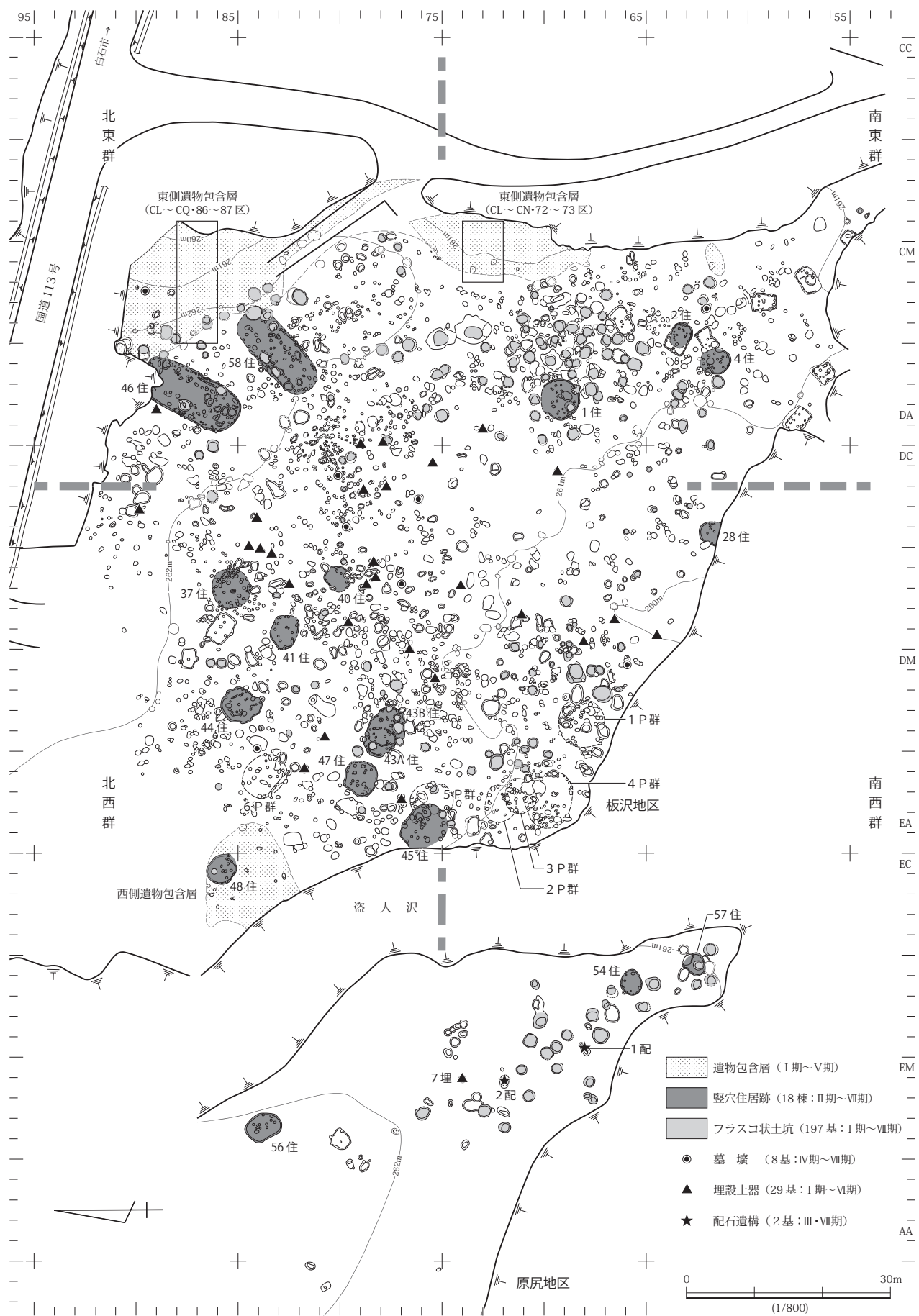


図3 小梁川遺跡(板沢・原尻地区)の集落構成

式（Ⅶ期）2棟で構成されており、居住施設は西側に偏在していたことになる。また住居に関連した遺構として、焼け面を囲むピット群が6基検出されている。いずれも西側の居住帯に分布し、時期の特定は困難であるが、地床炉を有した竪穴住居の痕跡と推定される。

フラスコ状土坑 板沢地区と原尻地区では、貯蔵施設と見られるフラスコ状土坑が197基検出された。前者が172基、後者が25基で、その内時期が特定されたのは半数に満たない88基で、内訳はⅠ期27基、Ⅱ期8基、Ⅲ期5基、Ⅱ or Ⅲ期3基、Ⅳ期22基、Ⅴ期17基、Ⅵ期3基、Ⅶ期3基で、大木6～7b式が大半を占めており、大木8a式と同8b式を合わせても6基に過ぎない。大木6式のフラスコ状土坑が北東群に多く分布するのに対し、それ以降は南東群に集中するが、該域にも大木6式期の土坑が認められる。区域別では北東群が42基、南東群が62基、南西群が39基、北西群が29基で、南東群の数量が突出しており、特にCO～DB・65～72区の24m四方の範囲に44基の土坑が集中する。また大半の堆積土は自然堆積と思われるが、南東群には人為的に埋め戻された形跡のあるフラスコ状土坑が多く認められる。原尻地区のフラスコ状土坑は南東に延びる尾根上に並列するが、時期が特定された土坑は僅か1基（Ⅶ期）しかない。

土器埋設遺構 板沢地区と原尻地区では、土器埋設遺構が30基検出された。前者が29基（19号埋設土器の位置は不明）、後者が1基で、大半の土器が横位に埋設されており、底部を欠いた例が多数認められた。埋設施設の一形態と考えられ、遺構の中でも中央寄りに位置するものが多く、Ⅰ期4基、Ⅱ期1基、Ⅲ期1基、Ⅳ期1基、Ⅴ期15基、Ⅳ or Ⅴ期1基、Ⅵ期4基、時期不明2基で、大木7b（新）式が半数を占めている。土器埋設遺構は一般に子供を埋葬した土器棺墓として、母胎回帰の観点から再生を祈った施設と理解されており、日常生活で使用された土器が転用された例が多いが、二次的な加熱の痕跡を持たない、口径50cm超、現存高60cm超の大型の優品（図6-91）も存している。

墓 墳 墓墳は人為的に埋め戻され、埋葬時に添えられたと思われる遺物を出土した楕円形・円形の土坑で、8基検出された。中央部に4基、北東群・南東群・北西群・南西群に各1基ずつ分布しており、1～5号墓墳は伴っ

た土器（2～4号墓墳は浅鉢形土器）から大木7b～8a式に比定されている。時期の特定が困難な6～8号墓墳からは、耳栓が出土している。

その他の土坑 板沢地区では所属時期の確認された土坑が65基存する。その内訳はⅠ期27基、Ⅱ期5基、Ⅲ期6基、Ⅳ～Ⅴ期11基、Ⅵ期10基、Ⅶ期4基で、大木6～8a式に主体がある。円形や楕円形を基調とし、フラスコ状土坑よりも小規模で、全体的に散在するが、その中には貯蔵穴や土坑墓と思われるものも含まれるであろう。

（3）小 結

集落中央部の遺構が希薄な分布状況から、環状集落に近い構成と判断される。報告書では「求心的な集落構造」（村田ほか1987：470頁）と総括され、環状集落とは断言していない。谷口康浩氏の定義では、環状集落は「中央に広場があり、その周囲に住居が配列された形の集落」で、「住居群に囲まれた中央広場に集団墓地が計画的に造営される点」が重要な特徴となっており、「重帯構造」と「分節構造」の二つの基本的構造が認められる。重帯構造は広場を中心として各種の建物や施設を同心円状の所定の圏内に配置するもので、分節構造は環状集落の内部を直線的に区分する構造を指す（谷口2005：4-6頁）。

小梁川遺跡では中心に遺構が希薄なエリアが存し、埋葬施設が中心寄りに散在するが、集団墓地が造営された状況は確認できず、重帯構造が明瞭とは認めがたい。一方南東群にフラスコ状土坑が集中し、大型竪穴住居跡は北東群、居住域は西群といった遺構分布の偏在が見られ、集落内の分割が可能であることから、分節構造は適合されよう。但し大木6～8b式の長期間にわたり累積した集落形成の結果であり、集落を構成した集団の内部の関係を反映しているとは必ずしも言い切れない。遺物包含層の形成やフラスコ状土坑の状況から、集落の主体は大木6～7b式であったと考えられる。しかしその期間の住居跡は総数で6棟に過ぎず、それ以降の大木8a・8b式の方が7棟と多くなっており、住居棟数から環状集落と決することは躊躇せざるを得ない。また南側は白石川の段丘崖で削平を受けたため、遺構が消失し少なくなっている可能性も否定できない。

3 小梁川遺跡出土土器による時期区分

(1) 小梁川遺跡の遺物包含層

小梁川遺跡の東縁の段丘面から段丘崖部分のCM67区からCO～CR90区にかけて、大規模な捨て場跡である「東側遺物包含層」が検出された。南北約70m、東西約15m、最大層厚は約120cmを測り、最も分層されたCL72区の細別層位は10枚を数えた。集落の北東群と南東群の外縁に跨がり、包含層は更に広がっていたと推定されるが、北側は国道113号、東側は砂利採取施設によって削平されており、また包含層の中央部は白石川へ通じる道路によって削平され、北側と南側に分断されていた(図3)。

包含層は主にシルト質の暗褐色～黒褐色土で構成され、廃棄された礫と共に多量の人工遺物が出土したが、シカやイノシシの焼骨等の自然遺物も含まれていた。土器は前期末葉大木6式～中期前葉大木7b式が出土し、土器以外の人工遺物としては円盤状土製品、土偶、三脚形土製品等の土製品、石鏃、石匙、石錐、石篋、石斧、石皿、磨石、凹石等の石器類が出土した。

調査は3m四方のグリッドを基本として、各グリッドの堆積層を分層して調査されたが、特に良好な堆積が確認されたのは、北側のCL～CQ・86～87区と南側のCL～CN・72～73区(図3)であった。層位は上位より第I層～第V層の5枚に大別され、大木6～7b式にかけて5段階にわたる変遷過程が層位的に跡づけられ、出土土器は以下に示したように5つの土器群に対比された^(註4)。なお当該期研究をリードする今村啓爾氏は、小梁川遺跡について「量的に多い前後の時期に挟まれて五領ヶ台Ⅱa、Ⅱb、Ⅱc、竹ノ下式並行期が極端に少ない」(今村2010:367頁)と評価しているが、以下のⅡ期とⅢ期の土器が該当する。

板沢地区では遺物包含層以外に、Ⅵ期(大木8a式)の竪穴住居跡5棟とⅦ期(大木8b(古)式)の竪穴住居跡2棟が検出され、白ハゲ地区ではⅧ期(大木8b(新)式)の竪穴住居跡5棟が検出されている。従って小梁川遺跡の出土土器は計8つの時期に分類されているが、層位的な上下関係が判明したのは、前半期のⅠ～Ⅴ期に限られる。なおⅧ期は主体が白ハゲ地区に移行したため、集落分析からは除外し、本稿ではⅦ期までを対象

とした。

また板沢地区の西端の平坦面でも、小規模な遺物包含層が検出されている(西側遺物包含層)。南北約14m、東西約14m、最大層厚は約20cmを測り、にぶい黄褐色を呈した1枚の層位を確認した。縄文前期前葉～中期中葉(大木8b式)までの土器が出土したが、主体をなしたのはⅢ～Ⅳ期である。

(2) Ⅰ期(大木6式1～4期)の土器

Ⅰ期は東側遺物包含層第Ⅴ層から出土した土器が主体で、報告書では第Ⅰ群土器として前期末葉に位置づけられ、同層準は南側のCL～CN・72～73区で1枚、北側のCL～CQ・86～87区では最大3枚(a～c層)に細分された。今村啓爾氏の5細分編年(今村2010)の大木6式1期～4期の土器に該当し、詳細は別稿(小林2016)で考察したが、同遺跡では先行する大木5b式の土器は認められず、同6式1期になって忽然と集落の形成が始まったことになる。

Ⅰ期の土器のうち図4-1・2が大木6式1期、3～9が同2期、10～14が同3期、15・16が同4期に位置づけられる。大木6式は長胴形と球胴形の土器を主体に構成されるが、この区分は大木6式の成立した時期ではそれ程明瞭でなく、2期以降に分化が進行した。長胴形は頸部の括れた胴部の長い深鉢形土器で、口縁部・頸部・胴部の三つの文様帯を有した例(9・11・12・16)、胴部文様帯を欠いた例(6・8・13)、頸部と胴部文様帯を欠いた例(7)の三様が見られる。球胴形は外反する口縁部、球状に膨らむ胴部、円筒形の台状部の3段からなる器形で、結節浮線文、ソーメン状浮線文、結節沈線文等の文様表現で飾られたものが多く、特に3期に「浮線文系球胴形土器」(14)が発達する。15は報告書で第Ⅱ群土器に分類されたが、口縁部に渦巻き状の突起を配し、括れ部下端にかけて「く」字状の短沈線文が繰り返されることから、筆者は大木6式4期に位置づけた(小林2016)。

(3) Ⅱ期(大木6式5期～五領ヶ台Ⅱ式並行期)の土器

Ⅱ期は東側遺物包含層第Ⅳ層・第Ⅳ層上面から出土した土器が主体で、報告書では第Ⅱ群土器として中期初頭に位置づけられ、同層準は南側のCL～CN・72～73区で1枚確認された。今村氏の編年研究の大木6式5期～五領ヶ台Ⅱ式並行期まで含まれるが、前記したように

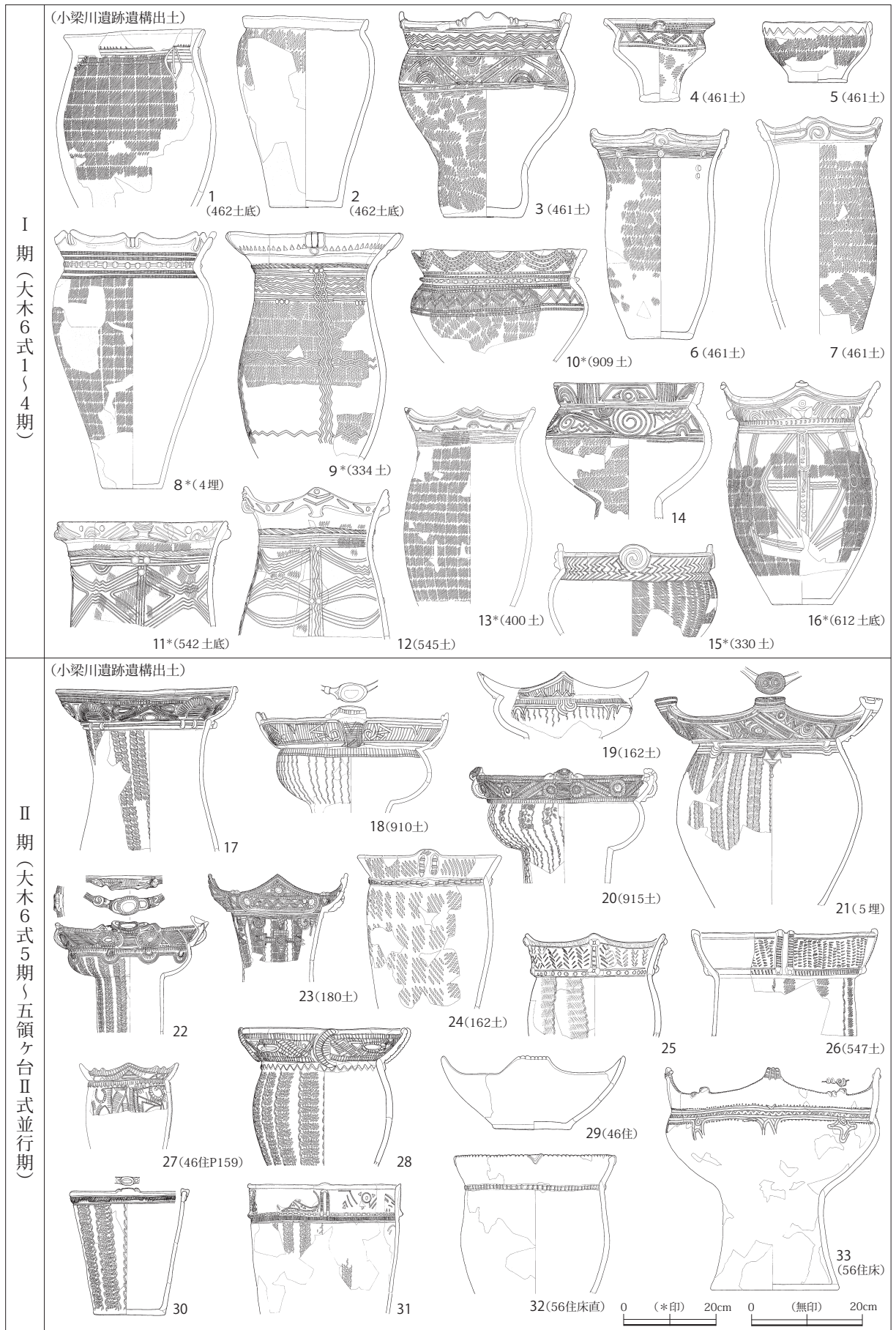


図4 小梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉～中期中葉の土器 (1)

五領ケ台Ⅱ b・Ⅱ c 式並行期の土器は判然としない。

Ⅱ期の土器のうち図4-17～23が大木6式5期、27・28が五領ケ台Ⅰ a 式並行期、30・31が同Ⅰ b 式並行期、32・33が同Ⅱ a 式並行期に位置づけられ、24～26はこれ等に伴った「糠塚系統」土器である。大木6式5期は先行型式までの長胴形と球胴形の文様上の区分がなくなり、胴部が球状に膨らむかどうかの区分となり、胴部には縦方向の縄文が施され、羽状に組まれたり、両端に結節回転文が加えられる。文様は口縁部に集約され、浮線を2本平行に貼り付けて文様を描き、その2本を短い浮線で梯子形に繋いだ梯子形文様やドーナツ形貼付文に刻みを入れた文様が認められる。続く五領ケ台Ⅰ a 式並行期は浮線文による表現が沈線文に置き換えられ、短沈線を並べた梯子形の文様図形を特徴とする。同Ⅰ b 式並行期は口縁部文様の簡略化が進み、幅狭の文様帯をもった円筒形(30・31)が目につくが、東北では同式の指標となる細線文が普及しておらず、Ⅰ a 式並行期との区分は必ずしも明確でない。同Ⅱ a 式並行期の土器は極僅かとなるが、原尻地区では当該型式の住居跡(56号住居跡)が検出され、32(床直上)と33(床面)が出土した。同式は口唇部の刻みと口唇外面の縄文帯及び沈線に沿う刺突文を特徴とするが、33は縄文帯を欠くが、口唇部が細かく刻まれ、括れ部の水平の複合鋸歯文の上下を区切る平行沈線文に沿って刺突列が加えられ、同式の特徴を具備している。

上記した装飾を持った土器に伴って、在地系の「糠塚系統」土器が出土する。同系統は口縁部を水平線で数段に区分し、その各段に縦の沈線を並べて挿入し、胴部を削り取ったような無文または縦方向の羽状縄文になるもので、大木6式5期(図4-24)に登場し、五領ケ台Ⅰ式並行期(25・26)に続き、同Ⅱ a 式並行期には文様が単純化し、口縁部や口縁の折り返し部に縄文を加えたものが増える(今村2010:362-363頁)。更に少量ではあるが、折返し口縁を有した縄文施文の「下小野系粗製土器」に類似した土器(今村2010:126-141頁)も出土している。

(4) Ⅲ期(大木7a(新)式・竹ノ下式並行期)の土器

Ⅲ期は東側遺物包含層第Ⅲ層から出土した土器が主体で、報告書では第Ⅲ群土器として大木7a式の範疇に含まれた。同層準は南側のCL～CN・72～73区で最

大5枚(a～e層)、北側のCL～CQ・86～87区で最大2枚(a・b層)に細分され、また西側遺物包含層にも資料がまとまっている。

竹ノ下式は五領ケ台式を母体とし、阿玉台式へ変わって行く過程の東関東の型式(今村2010:82頁)で、阿玉台式直前型式として並行するのは大木7a式の新しい部分である。本稿では便宜的に「大木7a(新)式」と呼称し、中ノ内A遺跡第Ⅰ群土器(相原ほか1987)に対比したが、この時期から非常に大型の土器が増加する。4単位の大きな富士山形の口縁(截頭波状口縁)を有した器形(図5-36・38～43)や、口縁部の幅(高さ)が狭く胴部が樽形に膨らんだ器形の深鉢形土器(45～49)が特徴的で、前者は波頂下の数本の縦線や口縁に沿った弧線を中心に区画文が展開するが、波頂下の渦巻きは顕著でない。後者では胴部に隆起線による半円形の区画を有し、隆起線に沈線が沿い、複合鋸歯文(交互の刺突)列が沿うもの(44)もある。胴部文様は縄文地文が施されており、下限が水平に区画されるもの(44・49)と区画されないもの(45～48)が見られるが、後者の方が卓越する。括れを持つ器形では、括れ部に4単位の細長い楕円形区画が作出され、交点部分にX字状の貼付文が配される(34・37・44・46)が、円形貼付文を挟む例(45)も見られ、円筒形の胴部の上に内彎する口縁部のついたキャリパー形の器形(34)も現出する。截頭波状口縁の波頂部は縦に刻まれたもの(35・36・39・40・42)が多く、38の波頂部は「U」字状の装飾、41は三角頭の装飾、43は獣面突起風の装飾で小さな橋状把手が配される。また口縁部の円弧状突起の内・外面には、粘土紐や沈線による「の」字状や弧状の装飾が認められる(44・48・49)。43の口縁部と胴部の文様は、隆起線に沿って押引き文が施され、口縁部に2本一組の押引き文による三角形区画が作出される。

深鉢形土器の他に浅鉢形土器も多く存するが、中ノ内A遺跡に特徴的な大きな截頭波状口縁の浅鉢は明確でない。50の口縁部には4単位の口縁部突起に対応した楕円形区画文が見られ、51は交互刺突文が巡らされる。また文様が簡素な粗製の傾向の土器として、折返し口縁や口縁部に撚糸圧痕を水平に多数並行して加えた「下小野系粗製土器」に類似した土器も多数認められる。なお

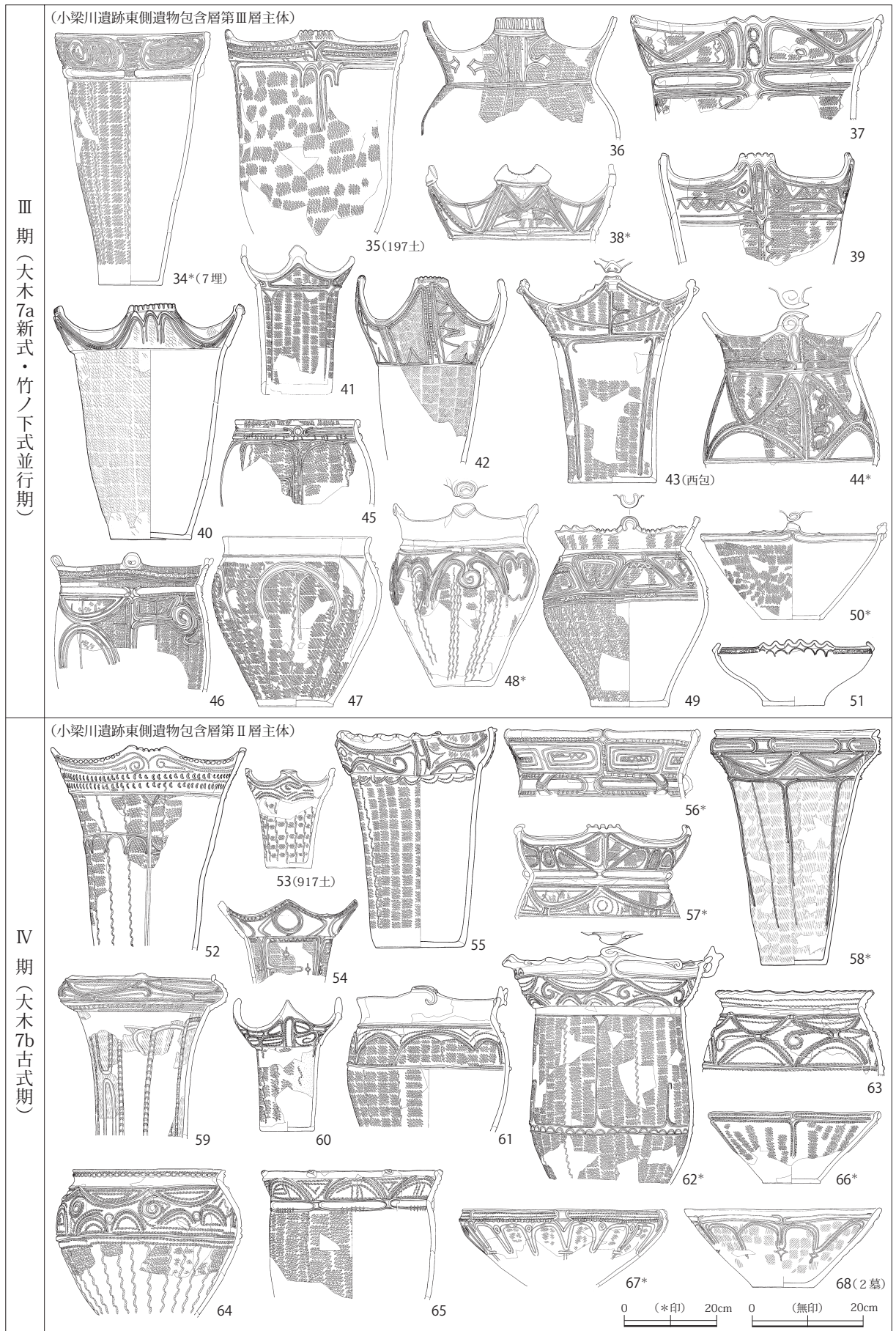


図5 小梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉～中期中葉の土器(2)

小梁川遺跡の北方約 25 kmの中ノ内 A 遺跡には「かなりの数の竹ノ下式をとまなっており」（今村 2010：375 頁）、北方約 86 kmの山形県水木田遺跡にも同式が認められている。しかし小梁川遺跡では竹ノ下式に相当する土器を抽出することができない。

（5）Ⅳ期（大木 7b（古）式期）の土器

Ⅳ期は東側遺物包含層第Ⅱ層から出土した土器が主体で、報告書では第Ⅳ群土器として、大木 7b 式の古い部分に位置づけられ、同層準は北側の CL～CQ・86～87 区では最大 6 枚（a～f 層）に細分された。阿玉台Ⅰ a 式が並行関係にあり、小梁川遺跡には「わずかであるが阿玉台Ⅰ a 式類似の土器を伴っている」（今村 2010：374 頁）と指摘されており、本稿では便宜的に「大木 7b（古）式」と呼称し、中ノ内 A 遺跡第Ⅱ群土器（相原ほか 1987）に対比した。隆起線に沿った撚糸圧痕による文様が特徴的で、複合鋸歯文は殆ど見られなくなるが、隆起線に沿う沈線や縄の側面圧痕は、阿玉台式の隆起線に沿う押しきと同じ意味を持つものと理解されている（今村 2010：374 頁）。

先行型式に特徴的な截頭波状口縁の土器は少なくなり、波頂部を低くした土器（図 5－52・57）や、波頂部に装飾を貼付したり（53）、先端の尖った大波状口縁の土器（54・60）が認められる。胴部が樽形に膨らんだ器形も継続するが、胴部文様帯の下限が区画され、胴上部は縄文地文を欠いている。弧状区画文が多用され、「上と下から来る隆起線による弧が接し、菱形に残された余白の中に渦巻が加えられ」（今村 2010：376 頁）た例（63）が特徴的で、57 の胴上部の三角形区画内には縄の側面圧痕による玉抱き三叉文が充填される。またキャリパー形の器形（55・58・59）が明確となり、内彎した口縁部の区画文に沿って縄の側面圧痕が加えられる。深鉢形土器は一般に文様単位数が増加しており、楕円形区画文が口縁部に進出し 4 単位以上となり、口端が短く外折したキャリパー形の 58 は、口縁部 6 単位、頸部 7 単位、胴部 5 単位と部位毎に異なった単位数で構成される。59 は頸部に短い撚糸圧痕を縦に並列させ、胴部は縦分割を基本とした半截竹管による「U」字文で構成され、後続型式に顕在化する特徴の萌芽が認められる。

浅鉢形土器は平縁で、深鉢と同様に区画に沿って縄の

側面圧痕が多用される。口縁部には 4 単位以上の楕円形区画文を有し、胴部には半截竹管（67）や撚糸圧痕（68）による連弧文が施される。また先行型式と同様に「下小野系粗製土器」に類似した土器や口縁に縄の押しきで文様を描く粗製傾向の土器（65）が伴っている。

（6）Ⅴ期（大木 7b（新）式期）の土器

Ⅴ期は東側遺物包含層第Ⅰ層から出土した土器が主体で、報告書では第Ⅴ群土器として大木 7b 式の範疇に含められた。同層準は北側の東縁に形成され、主として CL86 区・CL87 区・CM87 区から出土し、最大 4 枚（a～d 層）に細分されたが、土器の出土数量は先行型式よりも少なく、当該型式を以て東側遺物包含層の形成は終了する。連弧・縦位の連続した撚糸圧痕や連弧状貼付文（刻目・側面圧痕有り）に特徴付けられ、大木 8a 式への過渡的段階として阿玉台Ⅱ式に対比され、本稿では便宜的に「大木 7b（新）式」と呼称した。

内彎気味に外傾した口縁部を乗せた深鉢形土器が顕著で、波状口縁の波頂部には装飾が発達し、橋状把手（図 6－71・74）も認められる。口縁部文様は隆起線による区画文が配されるが、隆起線上に刻みや縦位の撚糸圧痕が加えられ、隆起線に沿って沈線や平行沈線が施される。胴部が樽形に膨らんだ器形（78・79・81・83）も継続するが、胴部が緩く内彎した長胴の器形が多くなり、樽形の器形では口縁部に鏢状に隆起線を巡らし、括れ部に橋状把手や突起を配した例（78・81・83）が見られる。深鉢形土器の胴部文様は縦分割を基本に、平行沈線（71）や隆起線による文様が胴下部まで展開するが、隆起線上に刻みや撚糸圧痕を加えた例（81）や縄文施文の例（79）、また胴部文様帯が多帯化した例（72・74・78・83）が見られ、胴部文様帯が発達するようになり、渦巻文や棘状の突出（81）といった後続型式の特徴の萌芽が認められる。

（7）Ⅵ期（大木 8a 式期）の土器

Ⅵ期は東側遺物包含層の形成が終了し、遺構から出土した土器のみとなり、報告書では第Ⅵ群土器として、大木 8a 式に位置づけられた。竪穴住居跡は 5 棟検出されたが、いずれも北西群に位置しており、北東群中心寄りの 339 号土坑（図 6－92～95）が一括性の高い資料となっている。当該期の土器の出土数は極端に少なくなる。

頸部で括れた器形が顕著で、口縁部が外傾した器形や

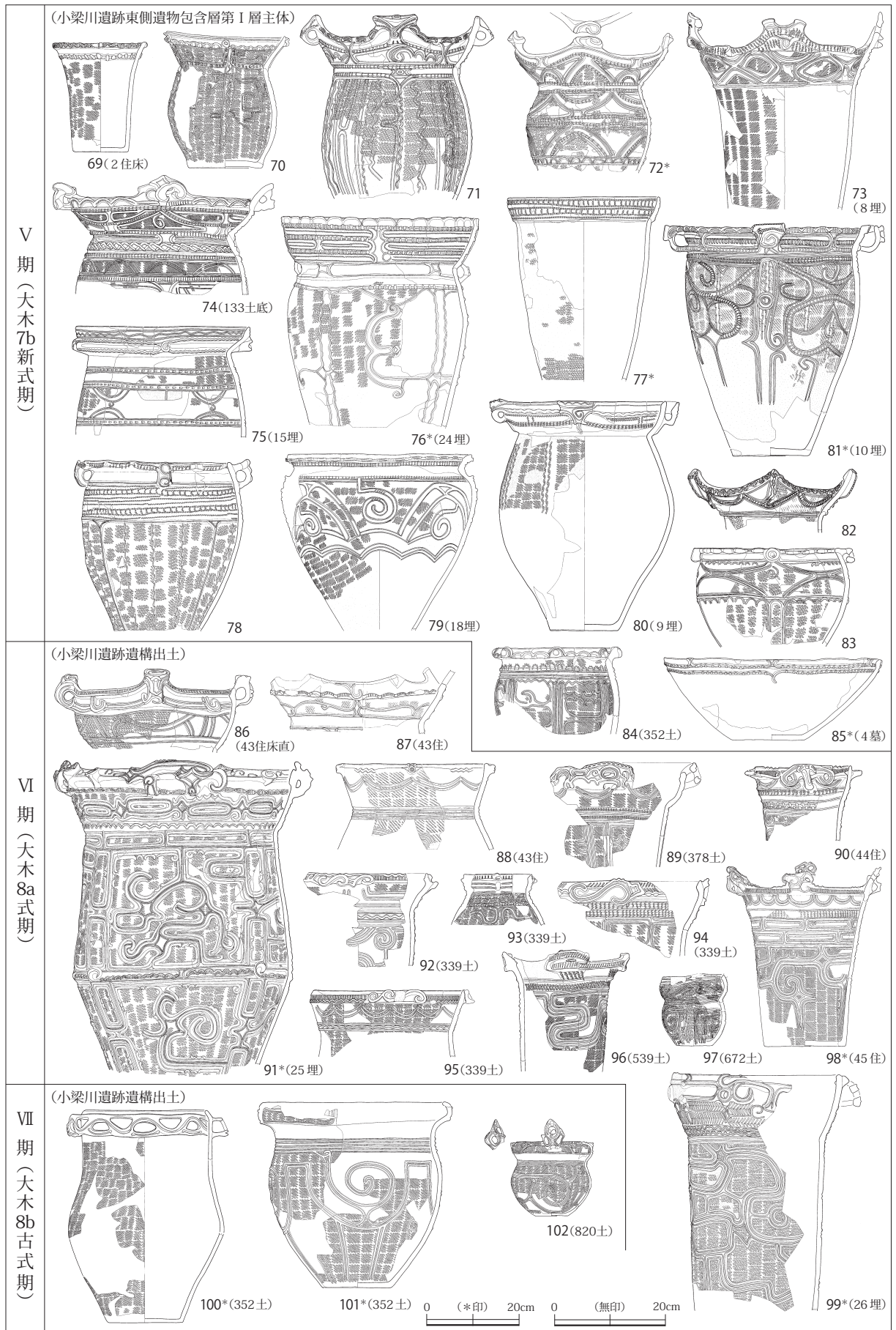


図6 小梁川遺跡出土の縄文時代前期末葉～中期中葉の土器 (3)

緩く内彎したキャリパー形が多く、胴部に最大径を持った広口壺の器形(88・93)や、括れを持たず口縁部が外反した円筒状の器形(98)も認められる。口縁部に橋状把手等の立体的な装飾突起が発達し、浅く幅の広い沈線や低く扁平な隆起線によって、方形や楕円形の区画文や「S」字状文・渦巻文・連弧状文等が描出され、また縦位の撚糸圧痕や口縁部上位に連続刺突文(刻目)等も認められる。胴部文様帯が発達するため、先行型式まで見られた結節回転文による「装飾的な縄文」は姿を消すが、羽状縄文や地文の縦位方向回転は継続する。

91は25号埋設土器で、現存高70cm弱を測り、文様帯の多帯化が著しい。口縁部に「S」字状の装飾性の強い橋状把手を配し、胴部は側縁を沈線で縁取った低い隆起線で、末端が渦を巻く曲線文様と方形区画文が交互に5単位展開する。また区画帯として刻みを加えた連弧状貼付文が配される。97は3条の細い沈線を基本として口縁部に棘状突出を伴う波状文、胴部に末端が渦を巻く曲折文が展開する。

大木8a式は通常2期に細分されるが、本遺跡では先行型式に出現した要素(縦の撚糸圧痕・連弧状貼付文)を残す古段階が主体となっており、胴部文様が3条の沈線文様で構成された新段階は、97を指摘するに留まる。

(8) VII期(大木8b(古)式期)の土器

VII期は報告書では第VII群土器として、大木8b式の古い部分に位置づけられた。続く大木8b(新)式(第VIII群土器)は白ハゲ地区に集落を移しており、板沢地区の最終段階に相当する。竪穴住居跡は南東群で2棟検出されたが、出土した土器は小片のみで、図6には北東群のV期の土坑である352号土坑(100・101)と、原尻地区の820号土坑(102)から出土した土器3点を図示した。

大木8b式はキャリパー形の器形と棘状の突出を伴った渦巻文を特徴とする。図示した土器は胴部が緩く膨らみ口縁部が強く内彎したキャリパー形の器形(101・102)で、括れ部に無文帯を巡らし、口縁部と胴部の文様帯を区分する。無文帯直下の頸部文様帯には3~4条の平行沈線文を巡らし、口縁部文様帯は横位に伸びた渦巻文、胴部文様帯は2本一組の隆起線(101)または3条の沈線(102)で曲流する渦巻文が展開する。大木8b式は2~3期に細分されるが、両例は棘状の突出が

顕著でなく、また文様帯の区分が明瞭であることから、同式の古い段階に比定されるであろう。

4 集落構成の年代の変遷

上記した時期区分に沿って集落構成を概観するが、本遺跡がピークを迎えるIV期とV期については、所属時期の特定が明確でない遺構が存し、IV~V期(大木7b式期)として提示されていることから、本稿でも包括して図示している。

(1) I期の集落構成(図7)

I期は大木6式1期~4期で、集落形成の開始期に相当する。遺構としては、フラスコ状土坑27基、その他の土坑27基、埋設土器4基が検出され、竪穴住居跡は検出されなかった。但し時期不明の住居跡や西側の焼け面を囲むピット群に見出せる可能性も否めない。

板沢地区のフラスコ状土坑の分布を見ると、北東群の東側遺物包含層上端線に沿って比較的大きめの土坑16基が帯状に分布する。また南東群(4基)と南西群(6基)にもやや小さめのフラスコ状土坑の分布が認められる。その他の土坑では、上記した3地点の他に北西群にも分布が見られる。埋設土器は中央エリアで3号埋設土器、南西群で1・2号埋設土器、西端で4号埋設土器(図4-8)が検出され、東側遺物包含層の形成も開始された。

時期別で見ると、大木6式1期はフラスコ状土坑(462・498号土坑)が北東群に出現し、隣接した東側遺物包含層の形成も始まる。続く同2期も北東群(334・461号土坑)に主体があるが、南東群にも不整楕円形の909号土坑(口径114×80cm、底径100×64cm、深さ26cm)、中央エリアや西端に3・4号埋設土器が構築されるなど、遺構の広がりが確認できる。同3期になると遺構は板沢地区の全面に展開する。北東群では545号土坑(図4-12)、南東群では177号土坑や222号土坑(十三菩提式鍋屋町系土器出土)、南西群では10・542号土坑(図4-11)、北西群では400号土坑(図4-13)が該期に位置づけられ、全体が4つのまとまりに分割され、環状を企図したような構成が認められる。続く同4期は北東群の612号土坑と、II期として報告された330号土坑(図4-15)のみで、東側遺物包含層から出土した土器も先行型式よりも減少する(小林2016)。

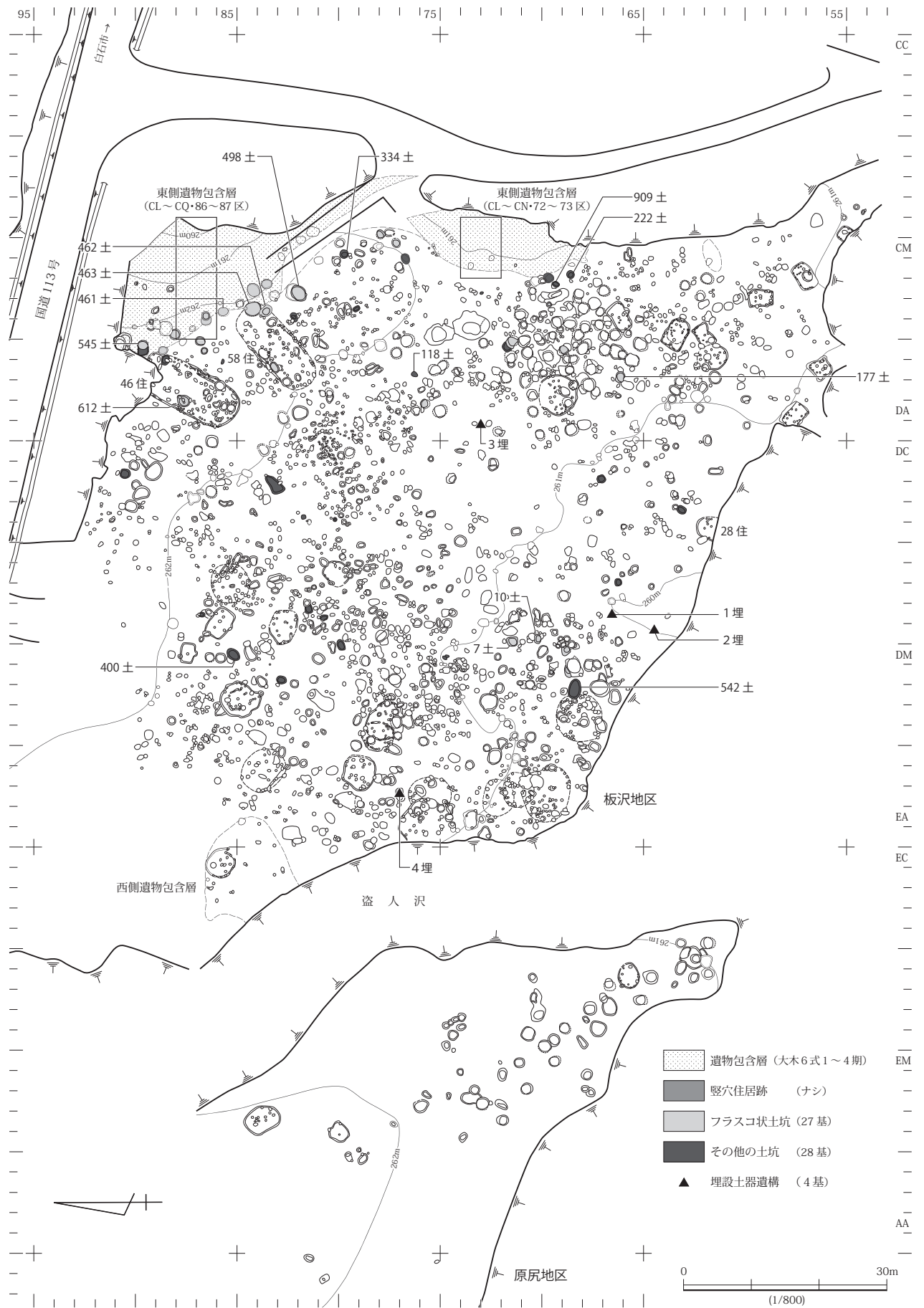


図7 小梁川遺跡Ⅰ期(大木6式1期~4期)の遺構配置図

I期の遺構は土坑と埋設土器のみで、その他に東側遺物包含層が加わるが、居住施設は明確でない。貯蔵穴が多数構築され、捨て場跡が形成された以上、定住的な集落として機能していたことは疑えない。時期不明の南端の28号住居跡や西側の焼け面を囲むピット群が該期の居住施設であった可能性、また掘り込みの浅い竪穴式もしくは平地式の住居で検出が困難であった可能性も考えられる^(註5)。最初期は北東群に主体があったが、大木6式3期には4つのエリアに分割されていた可能性が指摘され、集落形成の初期の段階である程度環状構成が企図されていたように窺われる。

なお大型住居である58号住居跡は、大木6式1～2期の462号土坑、同2～3期の463号土坑と重複するが、新旧関係は明確でない。恐らく住居跡の方が新しいと思われるが、該期の可能性も残されている。46号住居跡は住居内の堆積土から五領ヶ台I a式並行期の土器(図4-27・29)が出土しており、住居跡はII期に帰属されるが、大木6式4期の612号土坑(図4-16)を切って構築されていた。また1・2号埋設土器は型式の特定は困難であるが、複合口縁の長胴形であることから、大木6式前半期に位置づけられる。3号埋設土器は中央エリアで検出されており、墓域として既に意識されていた可能性も考えられる。北東群の330号土坑(口径194×104 cm、底径150×70 cm、深さ46 cm)は楕円形の土坑で、II期として報告されたが、出土土器(図4-15)はI期に比定され、規模・形状から土坑墓の可能性も考えられる。

(2) II期の集落構成(図8)

II期は大木6式5期～五領ヶ台II式並行期が相当し、大木6式5期→五領ヶ台I a式並行期→同I b式並行期→同II a式並行期→II b式並行期→II c並行期の6型式が含まれ、時間幅を有すると考えられる。東北中・南部の型式名では「糠塚式」や「大木7a式」が該当し、中期初頭に位置づけられるが、一部前期末葉を含むことになる。遺構としては、竪穴住居跡2棟(37・46号住居跡)、フラスコ状土坑8基、その他の土坑5基、埋設土器1基が検出され、東側遺物包含層の該期の主体的な層準である第IV層・第IV層上面が検出されたのは南側のみで、北側に明確な層準は確認されなかった。

先行型式で主体を占めた北東群では、フラスコ状土

坑が全く認められず、大型竪穴住居である46号住居跡を検出したのみとなるが、隣接した58号住居跡も長軸15 m前後の類似した構造で、主軸を集落の中心に向けて並列して存しており、時期的に近似していたと推定される。またその他の土坑として北東群に330号土坑が検出されているが、同土坑は上記したように大木6式4期でI期に帰属されており、II期の北東群は居住施設のみで構成される。またフラスコ状土坑が南東群に3基、南西群に3基、北西群と南西群の境界に2基検出され、大木6式5期の埋設土器(図4-21)が南西群、五領ヶ台I式並行期の竪穴住居跡(37号住居跡)が北西群で検出されている。

時期別で見ると、大木6式5期の遺構として、南東群にフラスコ状土坑である162号土坑(図4-19)、南西群に5号埋設土器(21)とフラスコ状土坑の180号土坑(23)、さらに中央寄り東側に915号土坑(20)、同じく西側に910号土坑(18)が検出されており、南北ライン(DE列)を挟んで東西に二分された分布を示す。図3-18が出土した910号土坑は、口径47×42 cm、底径30 cm、深さ43 cmの不整楕円形の小型の土坑である。また20が出土した915号土坑は、口径80×60 cm、底径72×34 cm、深さ4 cmの不整形の土坑である。両土坑は土坑墓とするには規模が小さいが、中央エリアを挟んで約25 m離れて対峙し、同時期の類似した形状の土器が出土したことから、集落を構成した基本的単位として、東西二群の分節構造を形成していた可能性が指示されている。

中期初頭の五領ヶ台I式並行期では北東群に大型竪穴住居跡(46号住居跡)、南西群に大型フラスコ状土坑(547号土坑)、北西群に竪穴住居跡(37号住居跡)が検出されている。37号住居跡は北壁以外は削平を受け明確でないが、壁柱穴と思われるピットの配列から、5.6 m×5.4 mの円形の竪穴住居跡で、床面のほぼ中央から地床炉(74×50 cm)が検出されている。大型住居跡とセットをなしていたと推測され、住居の周辺には近似した時期の土坑も検出されている。

五領ヶ台II a式並行期では原尻地区の56号住居跡(図4-32・33)が唯一の遺構で、板沢地区の東側遺物包含層でも良好な資料は抽出できない。該期は集落として衰退した時期で、人口規模が減少したと考えられる。そ

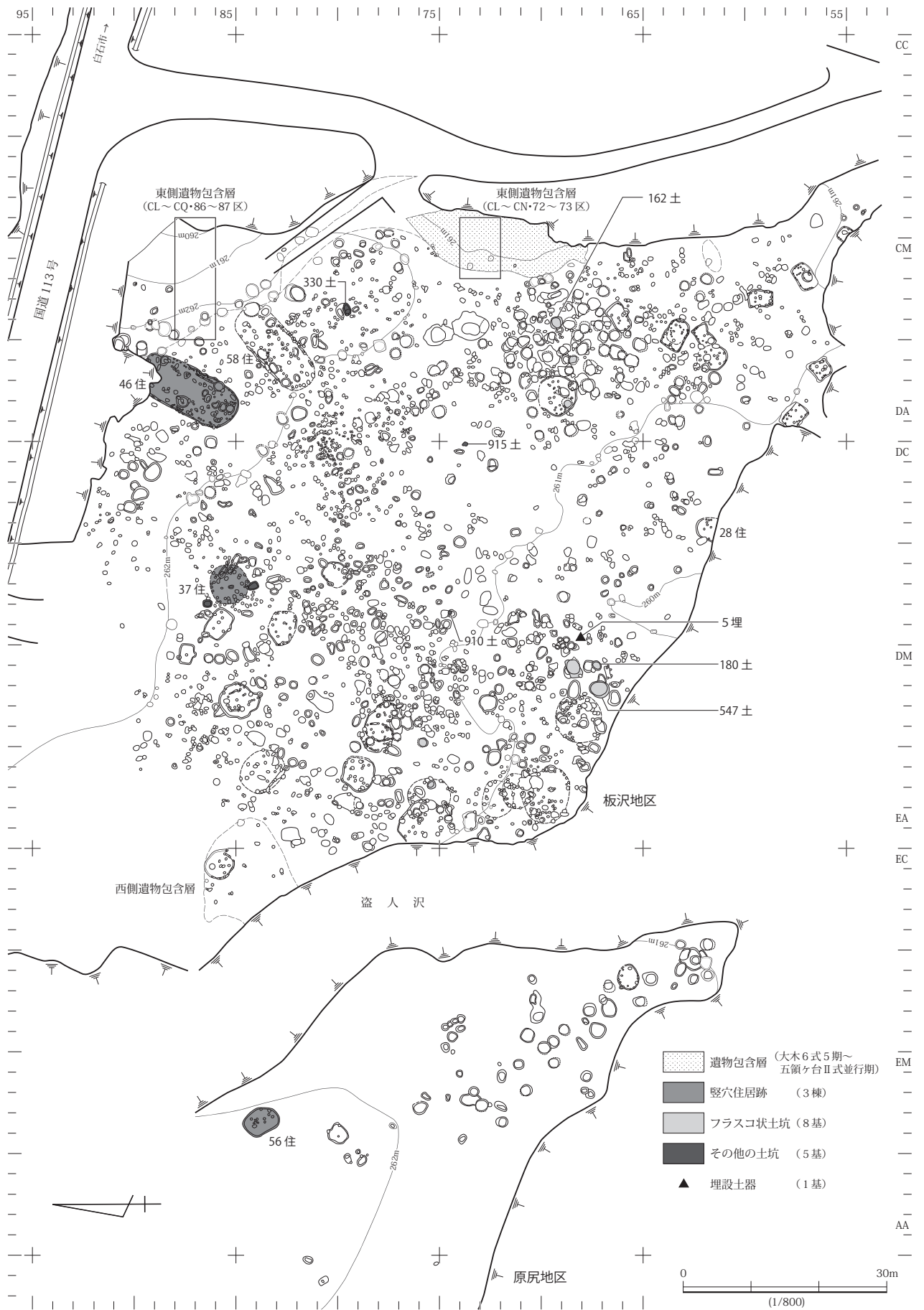


図8 小梁川遺跡Ⅱ期(大木6式5期~五領ヶ台Ⅱ式並行期)の遺構配置図

して続く五領ヶ台Ⅱb・Ⅱc式並行期には、生活の痕跡を殆ど認めることができない。

小梁川遺跡では、大木6式5期から五領ヶ台Ⅱ式並行期に向かって遺構数や遺物量が減少しており、漸次衰退の傾向にあったと推定される。先行型式で確認できなかった居住施設が検出されたが、多く見積もっても3棟を超えることはない。但し大型住居跡が含まれており、複数家族による共同居住が行われていたと想定される。

(3) Ⅲ期の集落構成 (図9)

Ⅲ期は大木7a式の竹ノ下式並行期に相当する。大木7a式の新しい部分に含まれ、五領ヶ台Ⅱb～Ⅱc式並行期が空白期となるため、Ⅱ期とⅢ期の間がほぼ欠落した状況にある。遺構としては竪穴住居跡1棟、フラスコ状土坑5基、その他の土坑7基、埋設土器2基、配石遺構1基で、Ⅱ期と同様に原尻地区にも生活の痕跡が認められる。東側遺物包含層では該期の主体的な層準である第Ⅲ層が検出されており、西側遺物包含層でも該期の土器がまとまって出土している。

住居跡は北西群に構築され、南東群にフラスコ状土坑が3基、集落の中央付近に6号埋設土器が検出されているが、東側・西側遺物包含層の土器の出土量を考慮に入れると、遺構数が過少であるように思われる。

北西群の西側に位置する47号住居跡は、東西5.2m、南北4.7mの東西にやや長い不整円形で、壁高は13cmを測る。床面はほぼ平坦で、ピット46基と北西部に地床炉と思われる焼け面が確認され、北壁で周溝(深さ5～12cm)の一部を検出した。床面からは平面形が楕円を呈した無文の浅鉢形土器と深鉢形土器の底部資料、堆積土からは土器片が少量出土した。また隣接した小型フラスコ状土坑の581号土坑(口径126×90cm、底径100×76cm、深さ62cm)では、堆積土から炭化物がまとまって出土した。

南東群に位置する中型のフラスコ状土坑の129号土坑(口径200cm、底径154×144cm、深さ122cm)では、底面がほぼ全面が焼けており、焼土と共にオニグルミの殻が出土した。同じく楕円形土坑の197号土坑(口径130×86cm、底径90×74cm、深さ28cm)では、低平の截頭波状口縁と横位の交互刺突文を持った深鉢形土器(図5-35)が出土した。集落の中心寄りに位置し、形状・出土品から土坑墓の可能性も考えられる。

集落の中心では、6号埋設土器が検出された。80cm四方の隅丸方形の掘方で、底面から10cm程度浮いて横位の状態で、左右非対称の截頭波状口縁を持った深鉢形土器が埋設されていた。

原尻地区では7号埋設土器と1号配石遺構が検出された。7号埋設土器は106×82cmの楕円形の掘方で、キャリパー形のほぼ完形の深鉢形土器(図5-34)が、底面から28cm浮いた地点に斜位に埋設されていた。またその南方18mの1号配石遺構は、90×85cmの範囲に6個の石を「コ」字状、その内側に扁平な石を配置したもので、直下には主軸方向を合わせた口径230×110cm、深さ60cmの撥形の土坑が検出された。土坑は人為的に埋め戻されており、埋葬施設であったと考えられる。

Ⅲ期は集落として復興し始めた段階で、まだ遺構数は少ない状況にある。居住域が北西群、貯蔵施設が南東群、墓域が中心寄りといった傾向が見られ、集落を東群と西群に分割した構成となる。また原尻地区は埋設土器と配石遺構から、墓域が形成されていたと考えられ、7号埋設土器は斜位に埋設された唯一の遺構である。

(4) Ⅳ～Ⅴ期の集落構成 (図10)

Ⅳ期は大木7b(古)式、Ⅴ期は同7b(新)式で、Ⅳ～Ⅴ期は同7b式期に相当する。東側遺物包含層ではⅣ期の土器が第Ⅱ層、Ⅴ期の土器が第Ⅰ層から主体的に出土し、層位的に分離されたが、遺構としては竪穴住居跡3棟(全てⅤ期)、フラスコ状土坑39基(Ⅳ期22基、Ⅴ期17基)、墓壙3基(Ⅳ期1基、Ⅴ期1基、ⅣorⅤ期1基)、埋設土器16基(Ⅳ期1基、Ⅴ期15基、ⅣorⅤ期1基)、その他の土坑11基が検出され、フラスコ状土坑と墓壙以外はⅤ期に集中しており、帰属時期の偏向が指摘される。東側遺物包含層の出土土器から集落のピークはⅣ期にあり、Ⅴ期の層準は北側に限られ、衰退の兆候が認められるのに対し、遺構の内容ではⅣ期の方が見劣りすることになる。

Ⅳ期に位置づけられた明確な遺構は、フラスコ状土坑22基、墓壙1基(2号墓壙)、埋設土器1基(19号埋設土器)で、居住施設は検出されていない。19号埋設土器は板沢地区の旧表土中で確認され、位置については不明であるが、底面の3cm直上に正位の状態で埋設されていた。フラスコ状土坑は北東群4基、南東群13基、

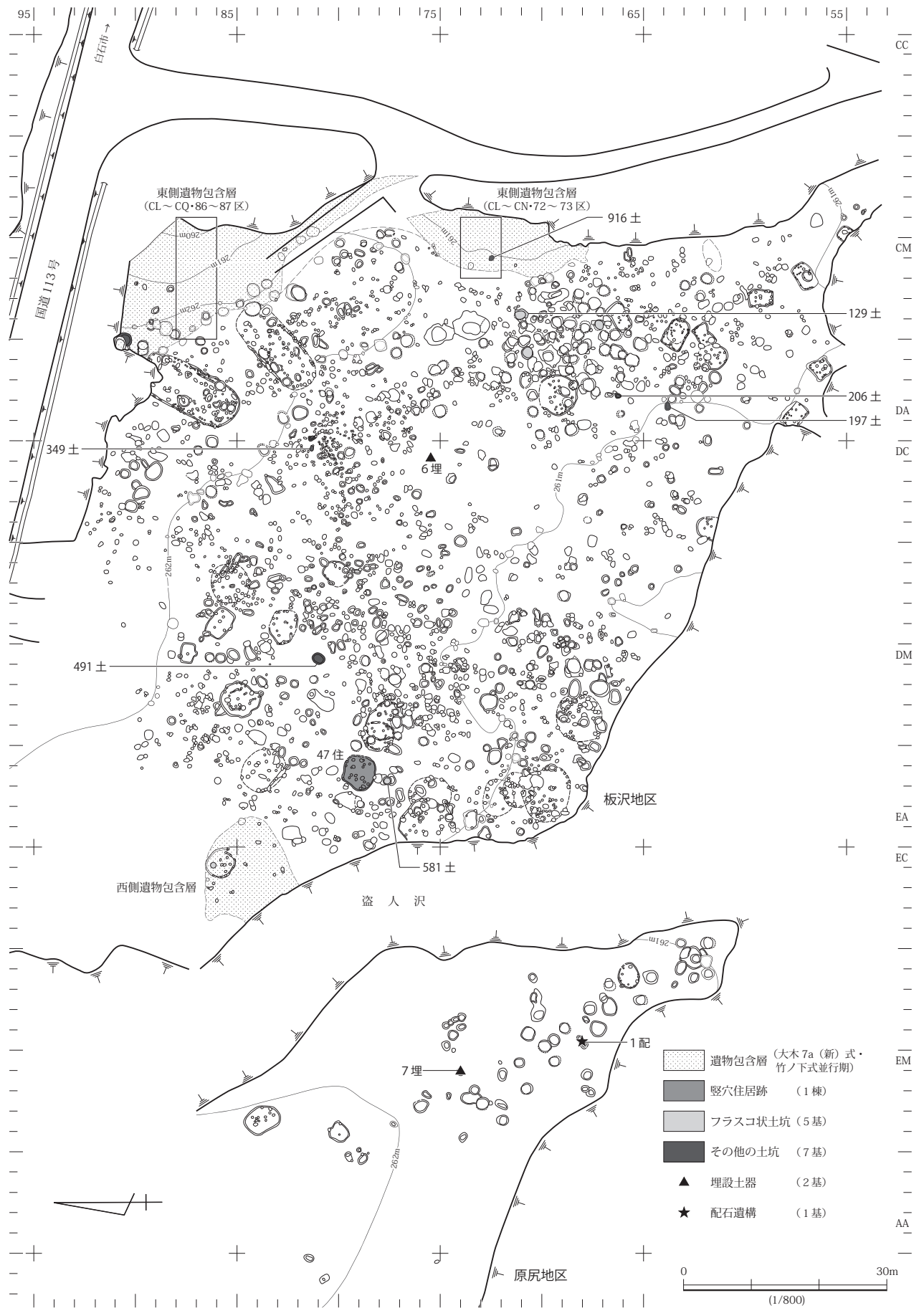


図9 小梁川遺跡Ⅲ期(大木7a(新)式・竹ノ下式並行期)の遺構配置図

南西群1基、北西群4基で、南東群に集中する。先行型に空白域であった北東群にも貯蔵施設が形成されるが、1期よりも中心寄りとなる。2号墓壙は北東群の中心寄りで検出されたが、2基の楕円形の土坑（口径70×60cmと140×80cm、深さ28cm）を「く」字状に結合した形状で、結合部付近に伏せた状態で浅鉢形土器（図5-68）が出土した。集落の中心付近に位置する917号土坑は、口径137×78cm、底径98×44cm、深さ23cmの不整楕円形の土坑で、堆積土から截頭波状口縁の小型深鉢（図5-53）と口縁部に連弧状の擦糸圧痕を配した大型深鉢が出土した。土坑の位置と形状、出土品から判じて、土坑墓の可能性も考えられる。

V期の遺構は、竪穴住居跡3基、フラスコ状土坑17基、墓壙1基、埋設土器15基で、竪穴住居跡は南東群のフラスコ状土坑群に隣接して1基、北西群の外縁付近で2基が検出された。南東群の2号住居跡は縄文前期前葉の住居跡（31号住居跡）と重複するが、3.7×2.8mの楕円形の小型住居で、壁高は最大で20cmを測る。床面から38基のピット（大半は壁柱穴）と中央西寄りに地床炉（80×50cm）、また北壁から東壁にかけて周溝（幅10～25cm、深さ10cm前後）を検出し、深鉢形土器の完形品（図6-69）が出土した。北西群の45号住居跡は7.4×5.4mの楕円形の中型住居で、壁高は最大で20cmを測り、床面からピット26基と南側に3ヶ所の焼け面を検出した。床面や床面直上から縦位擦糸圧痕の土器片が出土し、当該期に比定されたが、堆積土（1層）から大木8a式の大型深鉢（図6-98）も出土しており、住居の帰属時期にはやや疑問も残る。同じく48号住居跡はⅢ～Ⅳ期が主体となる西側遺物包含層の範囲に位置しており、住居跡は包含層直下の地山面で検出された。同住居跡は4.7×4.1mの楕円形の小型住居で、壁高は最大で12cmと浅く、幅20cmの周溝を巡らし、床面中央に地床炉（44×34cm）が検出され、堆積土からV期とI期（端重ねジグザグ文）の土器片が出土した。

V期のフラスコ状土坑は、北東群5基、南東群8基、南西群3基、北西群1基で、南東群に主体があるが、遺構数はIV期より減少する。V期は埋設土器が15基と突出している。大半は集落の中心寄りに構築されているが、外縁に当たる北端にも認めらる（14・23号埋設

土器）。底部を欠いた横位の状態が殆どで、底部を有するのは4例（9・10・16・23号埋設土器）に過ぎない。4号墓壙は北西群の中心寄りに位置し、口径94×92cm、底径72×67cm、深さ40cmの円形の土坑で、底面は平坦で、底面直上の中央部に浅鉢形土器（図6-85）が伏せられた状態で出土した。また南西群の544号土坑（口径114×106cm、底径89×65cm、深さ59cm）では、器高60cm超の完形の大型深鉢（V期）が出土した。

IV～V期のフラスコ状土坑では、底面直上層に炭化物が見られたり、堆積土の上層で炭化物・焼土が確認された例が多く存する。北東群の中心寄りに位置するV期の352号土坑（口径210×170cm、底径180cm、深さ190m）では、底面からトチノキの炭化片が多量に出土した。堆積土中位（6層）から図6-84が出土しV期に帰属しているが、最上位（1層）からは大木8b（古）式土器（100・101）も出土している。大木7b（新）式期にトチノキの食用化が進んでいたことを示す事例として注目される。北西群に位置するIV期の509号土坑（口径192×148cm、底径148×146cm、深さ125cm）では、底面直上の8層から焼土に混じってシカ・イノシシ等の骨片、また南東群のIV期の149号土坑（口径162×134cm、底径170×136cm、深さ126cm）では、底面直上の10層からクルミの殻片と炭化物が出土した。

IV～V期に包括して集落構成を概観したが、フラスコ状土坑以外は集落がピークを迎えたIV期の遺構数が少なく、退潮の兆しを見せるV期に増加するといった逆転現象が認められる。特に居住施設と埋設土器の差異が際立っており、V期に遺物包含層の形成が低調となるのに対し、埋葬行為や居住の痕跡が明瞭となる。IV期とV期を合わせた集落構成では、環状集落の様相が強まったように見受けられ、中央付近に埋設土器や墓壙等の埋葬施設が集中し、それ等をフラスコ状土坑やその他の土坑が取り囲み、南東群に貯蔵施設の集中域が形成され、更に西側外縁が居住帯、東側外縁が廃棄帯で構成される。住居跡が3棟と少なく、また子供を埋葬した土器埋設遺構が主体で、集団墓地を造営したとは認めがたく、環状集落であるとの確証は得られないが、中央付近の遺構が希薄で上記した遺構が取り囲む構成は、環状を企図していた

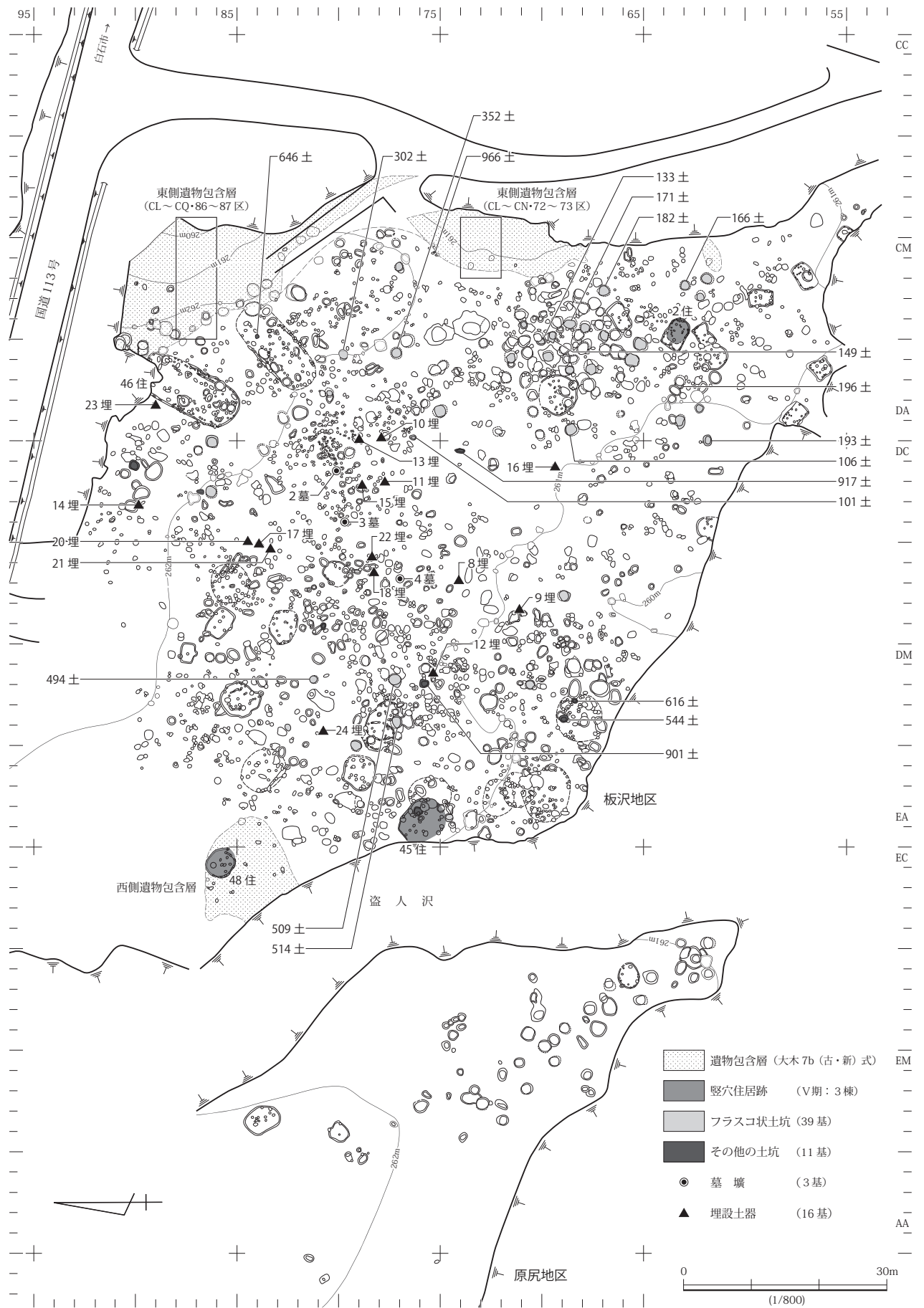


図10 小梁川遺跡IV~V期(大木7b(古・新)式)の遺構配置

可能性が高いと見ることができよう。

(5) VI期の集落構成 (図 11)

VI期は大木 8a 式期が相当する。I 期以来の東側遺物包含層の形成が終了したため、出土した土器の数量は大幅に減少する。遺構としては竪穴住居跡 5 棟、フラスコ状土坑 3 基、埋設土器 4 基、墓壇 1 基、その他の土坑 11 基が検出された。竪穴住居跡と埋設土器、墓壇は北西群に集中し、フラスコ状土坑は北東群・南東群の境界付近と南西群に分散しており、先行型式まで見られた貯蔵施設の南東群への集中は終息する。

竪穴住居跡は 5 棟を数え、板沢地区では前期前葉 (10 棟) を除くと最多となる。40・41・44 号住居は 6～7 m の間隔で北西—南東の方向に並列し、南方に約 15 m 離れた 43 号住居跡は 2 棟が重複する。40 号住居跡は 3.9 × 3.5 m の不整円形の小型の住居で、壁高は最大で 12 cm を測り、床面からピット 6 基と中央北寄りから焼土が認められ、堆積土から VI 期の土器片が出土した。41 号住居跡は 5.2 × 4 m の不整楕円形の小型住居で、壁高は最大で 14 cm を測り、床面からピット 12 基と西壁の一部に周溝 (幅 15～45 cm、深さ 10 cm、ピット 6 基) が認められ、床面と床面直上から VI 期の土器片が出土した。44 号住居跡は 5.4 × 5.3 m の円形の小型住居で、壁高は最大で 28 cm を測り、床面からピット 36 基と支柱穴の東列及び西列に断面「U」字形の溝 (幅・深さ 20～30 cm) が認められ、堆積土から中型深鉢 (図 6-90) が出土した。43 号住居跡は 43-A 号住居跡と 43-B 号住居跡が重複しており、43-A 号住居跡の方が古い。43-A 号住居跡は東西 4.4 × 南北 4.7 m の円形の小型住居で、壁高は最大で 10 cm を測り、床面から支柱穴 4 基と壁柱穴・周溝 (幅 10～30 cm、深さ 10 cm)、中央西寄りに地床炉 (50 × 48 cm) を検出した。43-B 号住居跡は東西 5.6 × 南北 5.8 m の円形の中型住居で、壁高は最大で 20 cm を測り、床面は 43-A 号住居跡とほぼ同じ高さで、支柱穴 6 基と壁柱穴・周溝 (幅 10～30 cm、深さ 5～15 cm)、中央部に地床炉 (80 × 60 cm) を検出した。出土遺物は両住居で一括されており、区分することができないが、床面直上から図 6-86、堆積土から 87・88 が出土した。

フラスコ状土坑は北東群・南東群の境界付近に 2 基と南西群に 1 基 (539 号土坑) を検出したが、前者は

底径 200 cm 超、深さ 130 cm 超の大型土坑である。539 号土坑 (口径 190 × 162 cm、底径 130 × 110 cm、深さ 106 cm) は中型土坑で、堆積土最上位 (1 層) から中型深鉢 (図 6-96) が出土した。埋設土器は 9～10 m の間隔で 4 基 (25～28 号埋設土器) が北東—南西方向に並列していた。25～27 号埋設土器は底部を欠き横位に埋設されたが、28 号埋設土器のみ正位の状態で埋設された。この中で特記されるのは、南端の 25 号埋設土器 (図 6-91) である。同例は楕円形の掘方 (口径 110 × 92 cm、深さ 32 cm) の底面から 5 cm 浮いて横位の状態で埋設されたが、精巧な造作で二次的な焼成痕は認められず、日用品の転用ではないと考えられている。装飾性に優れた大型品であり、子供の土器棺に限定すべきではないように思われる。5 号墓壇は円形の土坑 (口径 46 × 44 cm、深さ 20 cm) で、皿状の底面から 20 cm 浮いた状態で、深鉢の胴部破片が外面を上にして出土した。またその他の土坑では、北東群の 339 号土坑 (口径 310 × 220 cm、底径 270 × 206 cm、深さ 34 cm) から図 6-92～95、北西群の 378 号土坑 (口径 146 × 126 cm、底径 128 × 104 cm、深さ 46 cm) から 89 が出土した。

VI 期は東側遺物包含層の形成が終了し、集落の東側での生活の痕跡が僅少となる。西側が主体的な生活エリアとなり、埋設土器や墓壇は住居跡付近に構築され、墓域と居住域の区分が不明瞭となる。なお遺構内から出土した土器は大木 8a (古) 式にほぼ限られており、同 8a (新) 式の 97 が出土した 672 号土坑 (口径 200 × 196 cm、底径 186 × 180 cm、深さ 22 cm) は、白ハゲ地区の南側に位置している。

(6) VII期の集落構成 (図 12)

VII 期は大木 8b (古) 式期に相当する。板沢地区では最終末の段階で、続く同 8b (新) 式期は白ハゲ地区北側に集落を移転しており、出土した VII 期の土器の数量は極僅かではない。遺構としては竪穴住居跡 2 棟、フラスコ状土坑 3 基、墓壇 1 基、配石遺構 1 基で、遺構数が減少し、集落として衰退した様相を示している。板沢地区では竪穴住居跡 2 棟とフラスコ状土坑 2 基が南西群、墓壇 1 基が南西群と分布域が限定され、また原尻地区ではフラスコ状土坑 (820 号土坑) と配石遺構 (2 号配石遺構) を検出した。

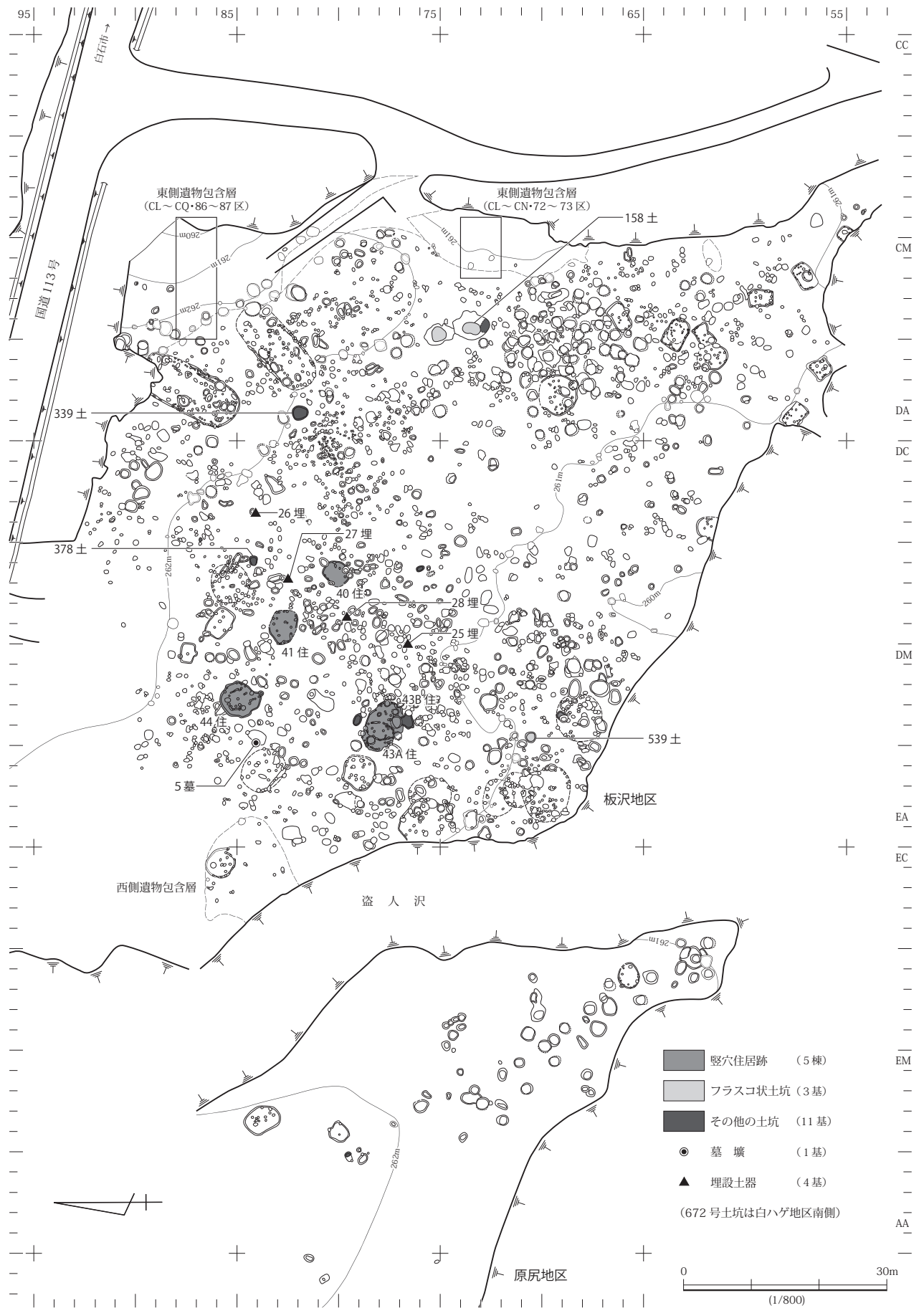


図11 小梁川遺跡VI期(大木8a式)の遺構配置図

1号住居跡は嘗てのフラスコ状土坑が集中した地点に構築された。直径6mの円形の中型住居跡で、壁高は最大で13cmを測り、床面からピット39基と中央に隅丸方形の石組炉(90×60cm)を検出した。また4号住居跡は1号住居跡の南方18mに位置し、4.5×3.8mの小型住居で、壁高は最大6cmと浅く、床面からピット11基と南壁に周溝(幅20~25cm、深さ12cm)、中央南寄りで焼け面(24×22cm)を確認した。両住居とも堆積土からⅦ期の土器片が出土した。

フラスコ状土坑では、中型の134号土坑(口径156×140cm、底径152×144cm、深さ146cm)と、小型の63号土坑(口径72×64cm、底径58×56cm、深さ50cm)の堆積土最上位(1層)から、Ⅶ期の土器片が出土した。また北東群南側のⅤ期の352号土坑の堆積土最上位(1層)から図6-100・101が出土しており、北東群まで生活エリアが広がっていたと考えられる。南西群の1号墓壙は口径100×86cmの不整楕円形で、深さは24cmを測る。底面の中央を1段低く作出し大きな平石を配置して、その直上に口縁部を北に向けた隆帯(指頭圧痕)を持った深鉢形土器(底部欠損)を横位に埋設していた。

原尻地区の2号配石遺構は、160×154cmの範囲の東西の縁辺に大型の石、その内側に大小の石を雑然と配置した構造で、その直下には口径190×170cm、深さ50cmの不整楕円形の土坑が検出された。土坑は人為的に埋め戻されており、埋葬施設であった可能性が考えられるが、底面上に置かれた平石の直上で小型深鉢(図6-102)の胴上半部が出土し、その下半部の土器は6m離れたフラスコ状土坑の820号土坑(口径202×201cm、底径202×198cm、深さ80cm)の堆積土最上位(1層)から出土し接合した。

Ⅶ期の居住域が先行型式の西側から一転して南東群に移り、生活の痕跡は東側区域にほぼ限られる。また沢を挟んだ原尻地区に僅かであるが埋葬施設と貯蔵施設が構築された。板沢地区の集落形成はⅦ期を以て終息するが、Ⅵ期(大木8a式)からⅦ期(同8b式)にかけては大木8a(新)式期の遺構・遺物が殆ど確認できず、この間がスムーズに推移したようにも思えない。削平された調査区域以外に集落が営まれた可能性も否めないが、調査所見に従うと集団規模はかなり縮小していたと

推定される。

(7) Ⅶ期以降の集落動態

Ⅶ期に後続するⅧ期は大木8b(新)式期に相当する。これまでの板沢地区から一転して白ハゲ地区の北側に集落が移転する。板沢地区の集落の中心(DC75区付近)を基準に見ると、北方へ180m以上離れた地点に集落が営まれ、検出された遺構は竪穴住居跡5棟、土坑1基である。

竪穴住居跡はⅦ期より多くなり、5棟は南北50m、東西30mの範囲に構築されていた(5・6・7・51・53号住居跡)。いずれも直径6m以内の円形乃至は楕円形の小型住居で、周溝は持たず、石組炉(7・51・53号住居跡)、袖部が付いた石組炉(6号住居跡)、祖型的な複式炉(5号住居跡)を有し、5~7号住居跡ではⅧ期の良好な土器が出土した。また該域では、254号土坑(口径124×116cm、底径80×66cm、深さ50cm)も検出されたが、フラスコ状土坑は認められない。

大木9式期になると、集落の主体は白石川を2km遡った大梁川遺跡(佐藤ほか1988)に移ったと考えられる。また小梁川を挟んで対岸にある小梁川東遺跡(真山悟ほか1985)でも、竪穴住居跡2棟(大木10(古)式)、土器埋設遺構4基(大木9(新)式~後期初頭)、後期初頭の土坑2基等が検出され、近接して小規模な集落が営まれていた(図2)。

大梁川遺跡は白石川に注ぐ大梁川左岸の舌状に張り出した南向きの丘陵緩斜面(標高300~310m)に立地した遺跡で、南北約80m、東西約50mの範囲に馬蹄形の集落が営まれていた(図13)。同遺跡では竪穴住居跡11棟(大木10(古)式9棟、後期初頭2棟)、敷石住居跡1棟(後期初頭)、炉跡6基(大木9(新)式2基、同10(古)式1基、不明3基)、土器埋設遺構9基(大木10(古)式7基、同10(新)式1基、不明1基)、土坑4基(大木10(古)式1基、同10(新)式3基)が検出され、大半を大木10(古)式期が占める。また調査区南側には、大木9(古)式~同10(新)式の捨て場跡(南側遺物包含層)が形成されており、小梁川遺跡と合わせると土器型式のスムーズな変遷を辿ることができ、小梁川遺跡の集団が大梁川遺跡に移転した可能性が高いと判断される。

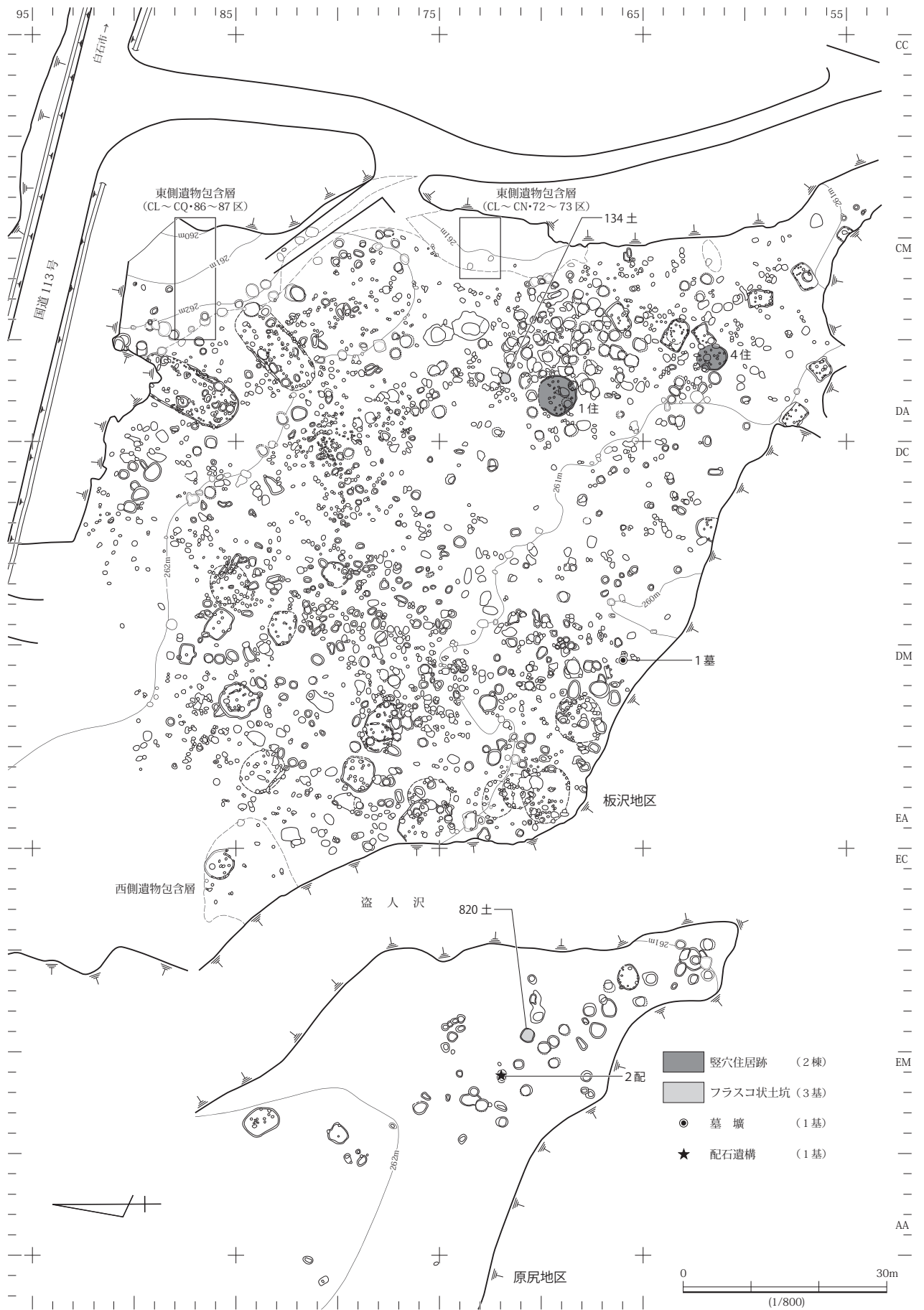


図12 小梁川遺跡Ⅶ期(大木8b(古)式)の遺構配置図



図 13 宮城県七ヶ宿町大梁川遺跡の集落構成

大梁川遺跡では膨大な量の土器（大木9（古）式～同10（新）式）が出土しており、大木8a式～同8b式にかけて退潮傾向にあった集団が、再び興隆した可能性が考えられる。長期間にわたって営まれた小梁川遺跡では、従前の規模での集団の維持が困難な状況が生まれ、新天地に集落を移すことで再興を果たしたように推察される。しかし大梁川遺跡の南側遺物包含層の形成は大木10（新）式で終焉し、後期初頭の土器は極僅かであることから、当該域が中期終末から後期初頭にかけて縄文遺跡の汎東日本的な潮流の中に取り込まれていた様相を窺うことができる。

5 結 語

小梁川遺跡板沢地区の7階梯（実際は6階梯）にわたる集落変遷を概観してきた。I期の大木6式1期に集落の形成が開始され、VII期の大木8b（古）式に集落として終焉するが、I期の大木6式3期に環状を企図した構成が成立し、以降遺構数は減少傾向にあり、大型住居跡が構築されたものの、II期の五領ヶ台II a式並行期で集落形成は一旦休止する。その後III期の大木7a式竹ノ

下並行期になって集落は復興し、IV～V期の大木7b式期にピークを迎える。土器埋設遺構と墓壙等の埋葬施設が中心寄りに集中し、それ等をフラスコ状土坑等が取り囲み、南東群に貯蔵施設の集中域が形成され、更に西側外縁が居住帯、東側外縁が廃棄帯となっており、環状の集落構成が明確となる。但し住居跡はV期の3棟しかなく、埋葬施設も土器埋設遺構が主体で集団墓地とは認められず、環状集落とは明言できない。続くVI期（大木8a式）では居住域が西側に偏在し、環状構成は取り入れられず、捨て場の形成も終わり、集落自体の退潮が顕在化する。そしてVII期（大木8b（古）式）では東側に生活エリアを移し、集落として終焉を迎える。その後VIII期（大木8b（新）式）に白ハゲ地区の北側に集落が移り、更に大木9式以降は主体が2 km離れた大梁川遺跡に移転したと考えられる。

小梁川遺跡では遺物包含層からの土器の出土量に対し、検出された該期の住居棟数が極端に少なくなっている。遺構は直径90 mの範囲に広がっており、大規模な集落と言えなくもない。しかし時期不明を含め検出された住居跡は18棟で、しかもその半数近くを東側遺物包

含層の形成を終えたVI～VII期が占めており、焼け面を囲むピット群6基を含めても、大規模集落と称することは躊躇せざるを得ない。近隣の同時期の大規模集落跡としては、北東方約19kmに蔵王町谷地遺跡（鈴木編2015）が位置している（図1）。同遺跡では竪穴住居跡以外に、亀甲形や長方形、環状の柱穴列が多数検出されている。柱穴列内に地床炉が確認できることから、掘削深度の浅い竪穴住居跡であったと思われる、小梁川遺跡においても削平され消失した同様の住居、または遺構としての痕跡を留めにくい居住施設が存した可能性を考慮する必要もあろう。

小梁川遺跡の中心部には、遺構密度が希薄なエリアが存している。全体では長期にわたる累積の結果として環状構成が認められるが、集落の継続期間を通して中央エリアに遺構を避けるような規制が働いていたように窺われる。I期とIV～V期に環状の配置が明確化するの、人口規模が増大した時期に該当し、その他の時期は規模を縮小したと推定されるが、中央エリアの墓域乃至は聖域としての意義は共有されていたのであろう。

大木7b式土器で見た場合、小梁川遺跡の北方約25kmに中ノ内A遺跡（宮城県川崎町）、南方約17kmに月崎A遺跡（福島県福島市）といった同時期の比較的規模の大きな遺跡が隣接する（図1）。前者ではかなりの数の竹ノ下式が伴い、大きな截頭波状口縁の浅鉢形土器が顕著である。また後者では阿玉台Ia式が多く、隆起線上に縄文を施文した大木7b式の「月崎系統」（今村2010:376-377頁）が卓越する。近接するものの小梁川遺跡とは異なった土器の様相が看取され、当該期は小地域毎の地域差が強まって、極めて狭い地域圏が並立した状況にあったことが指摘されている（今村2010:371頁）。一方山形県内陸部（最上川中・上流域）から宮城県南部・福島盆地にかけた地域には、有脚立像で長脚・出尻形を特徴とした「西ノ前型土偶」が多数出土しており、同土偶を保有するより広域的な情報の共有圏が形成されていた。土偶祭式に関わる集団間の共同意識を反映したと見るならば、通婚圏のような集団関係の地理的範囲を示している可能性も考えられる。

東北中・南部では近似の土器が広域に拡がった五領ヶ台I式並行期を経て、同II式並行期に一時的な衰退した状況にあり、大木7a式竹ノ下式並行期に回復し、同7b

式に安定した繁栄期を迎え、小地域毎の地域色が顕現した地域社会が成立したと見られている。小梁川遺跡は山間に位置した遺跡であり、白石川流域の拠点集落の一つであっても、西ノ前型土偶共有圏の中心遺跡には該当しない。しかし上記した社会的動態を的確に体現した遺跡として、土器研究だけでなく集落の研究面においても、指標性を有した遺跡との評価は十分可能であろう。

註

- 1) 本稿の図3と図7～12は、小梁川遺跡板沢地区と原尻地区の遺構配置を示した全体図である。『縄文時代遺構編』（村田ほか1987）所収の第6～11図（縮尺1/300）を原図として合成し、A4版の版面に収まる縮尺（1/800）で作成したが、原図の縮尺が一定でなかったため、3m四方のグリッドを基準に縮尺を補正しトレースした。またグリッドの特定が容易になるように加工した。
- 2) 原尻地区は当初「原尻遺跡」として、別個の遺跡として取り扱われていた。しかし遺構の時期が小梁川遺跡と一致し、両遺跡を隔てる盗人沢の規模も幅約20mと小さいことから、小梁川遺跡の延長と捉えられるとして、報告の段階で同遺跡の中に含まれた経緯がある。
- 3) 図3の板沢地区の方形の竪穴住居跡10棟（南東群8棟、北西群2棟）は、いずれも縄文前期前葉に帰属され、環状の集落構成には関連しない。
- 4) 報告書では出土土器を第I～V群土器に区分したが、本稿ではI～V期の呼称に置き換えた。またそれ以降の第VI～VIII群土器についてもVI～VIII期とした。
- 5) 福島県会津地方の大木6式期の拠点集落である磐梯町法正尻遺跡でも、該期の竪穴住居跡は検出されておらず、遺構としての痕跡を留めにくい居住形態であった可能性も考えられる。

引用文献

- 相原淳一 2001 「宮城県における縄文時代集落の諸様相」『第1回研究集会 基礎資料集 列島における縄文時代集落の諸様相』 pp.87-108 縄文時代文化研究会
- 相原淳一 2014 「宮城県の埋設土器・埋設遺構構成」『北日本縄文時代埋設土器・埋設遺構構成』北日本縄文文化研究会叢書2 pp.503-603 北日本縄文文化研究会
- 相原淳一ほか 1986 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書II 小梁川遺跡—遺物包含層— 原頭遺跡・養源寺遺跡・大熊南遺跡』宮城県文化財調査報告書第117集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 相原淳一ほか 1987 『中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他—東北横断自動車道遺跡調査報告書II—』宮城県文化財調査報告書第121集 宮城県教育委員会・日本道路公団
- 今村啓爾 2010 『土器から見る縄文人の生態』 同成社
- 小林圭一 2016 「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の大木6式土器」『研究紀要』第8号 pp.21-50 山形県埋蔵文化財センター
- 佐藤広史・伊藤裕ほか 1988 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書IV 大梁川遺跡・小梁川遺跡（石器編）』宮城県文化財調査報告書第126集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 真山悟ほか 1985 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書I』宮城県文化財調査報告書第107集 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 鈴木雅編 2015 『蔵王町内遺跡発掘調査報告書2 各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急発掘調

査(平成25年度) 附編1 消防庁舎建設計画に伴う谷地遺跡
発掘調査概報 附編2 谷地遺跡における放射性炭素年代(AMS
測定)』蔵王町文化財調査報告書第20集 蔵王町教育委員会
谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』 学生社
宮城県教育委員会編 1988 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報
告書付編』宮城県文化財調査報告書第126集 宮城県教育委
員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
村田晃一ほか 1987 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ
小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第122集 宮城県教
育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所

図版出典

- 図1：国土地理院発行(1996年3月)「1:500,000 地方図(3)
東北」をベースに作成
図2：(宮城県教委編1988：付図) 改変
図3・7～12：註1に記載
図4-1～13・15・16・18～21・23・24・26・27・29・31
～33：(村田ほか1987)、14・17・22・25・28・30：(相
原ほか1986)
図5-34・35・53・68：(村田ほか1987)、36～52・54～
67：(相原ほか1986)
図6-69・73～76・79～81・84～102：(村田ほか1987)、
70～72・77・78・82・83：(相原ほか1986)
図13：(佐藤ほか1988：第2・8・9図) 改変